繪本懲毖録

天保九戊戌歳七月

伯州米子　錦海船越敬祐著

繪本黴瘡軍談　全六冊

浪花　烽山重春畫　藏六亭藏版

市友船越君明業醫内外諸科典不兼通而最善攻黴毒所在施治亦以此爲先人目爲黴毉蓋於此症治方苦心研尋二十年間遂有所發明云嘗著黴瘡

瑣談徽瘡雜話等書並皆
國字為文擧症指方詳審
靡遺其意欲令黴家易讀
易解親知方劑當否謂理
好惡而不陷庸毉毒手也
獨柰輕薄子弟不喜是等

識言實說之書讀一過則
拋擲無顧君明察之今復
著穢褻軍談專傚小說之
体摹病樂交戰之状其事
奇怖其文工緻雖彼輕薄
之徒手一把之終不能釋

玩讀之久會當了得此症治方取舍利害君明用意可謂深切哉方今小說盛行書坊叢版月倍日增槪之皆是浮靡猥雜綴立勸懲之說睛開誨淫捷徑讀

之無益不如不讀若此書
則不厭假于寓言歸於實
用巧手段善方便眞有益
於世之書也其或徒讀徒
抗以爲尋常小說之流者
則非君明意矣
吉房

天保九年戊戌三月

櫟陰散人

浪華　森晋三書

述意

予此著述をなすハ強に名聞を好んが為にあらず熟世の有さまを見るに黴毒を患る者軽薄にして真実病を治するの意なし且又奸醫盲醫のために欺れ遂に不治の症となりて生涯を誤る者挙てかぞふべからず此輩の愁ひを解き因不実の医者の奸盲を辨明し病者として其毒を遁らざらしめんと欲して鄙陋を顧ず此草紙を綴りて世上に布くものなり凡黴毒とうけて来る者ハ其身に元より邪気に和して天稟乃毒あり故に黴毒あるものと交る時ハ其邪気天稟の毒に和して身中に流れ入りその後ハ下疳便毒淋疾等を發す此時ハ唯患る所ハうけし毒あるがごとくなれども五臓六腑ニ天稟のどく

あるゐハ此邪氣をしりぞくるゆゑ已ぬれども此毒ハ人身に和し
易き者ハ瘡瘍麻疹などのごとく其初發熱氣甚しく氣が
いく不食する等の苦しみなく故に瘡瘍麻疹などのごとく急に
死することもなく又急に治することもなく躰つかれて痿など
なもあらバ起立く働くこともなりがたく左右とも肉脱て痛
おとり遂にハ癈人となり或ハ癆瘵などの不治の症となる劇
症なりそれハ苦痛日久しくして死する者又多しかるにおそろしき
病なれども其初發ハ甚しき苦痛なけれバ兎角に怠り
とかく此症ハ怠しけれバ休んで居る療治ハならぬ強き薬ハ
眼眩がいやじや散薬ハ飲みにくひ煎薬ハ面倒な付薬ハ膏薬
くらう治るがよい酒ハのまれぬ居られぬ魚肉と喰ねハ飯が

喰ねなどて気絶のありたけといふが薬弱者のくせなり全体
是等の人ハいかなる料簡でや病ハ其身の敵なり我身を大切
とおもふて其敵となる病といふものありて打ちがたくは皆術の
不自由といひ又ハ生涯の苦痛を遁し遂ハ其身を喪ふハ是病
とやいはんやいはん一向論にかなはず是等の病人をうけ
まさバ奸医術を将く世に蔓り巧言令色雑藝をしく病家にとり
入り治療とするにも始終病人の機嫌を斟りて適当の治とするされ
初して瞑毒などハ瞑眩剤の功あることをしりながら病人のきらふ
ことを察して種々の言を設けて服薬ハ人を遁して逆上せしめ狂躁
生く乳その用ひるごとき者かから蕃薬剤などハ一回その効あり
ても家く某なるとハ薬毒のこりて後に害となるなどといふくとき

を用ひざと毒にもならず薬にもならぬ無益の緩剤をいくらも用ひて久損
せしめ迷惑おほきは損つてさら虚損といふなれば其いふことを治し痼
いへるんば膏薬とあるまたは阿片丸を用ひ一時の苦痛をたすけ
只枝葉のミ刈り除きて其根本を治せざれば何時も全治
もる期はうるかなりたとへば下疳または傳染洗薬膏薬などを用ひ
て一旦其處ハ癒るといへども又変じて便毒となり便毒となるとせバ骨痛
となり骨痛となるとせバ楊梅瘡となり楊梅瘡となるとせバ瘰癧
となりかくのごとく種々に変じて後には頭面手足胸背腰痛などに
凝結し其処種にては腐爛崩落癥痼に及ぶこともあり所謂二
葉を務らずして其命をふいにするなり其本をいへバ病人の自業自得
にして身勝手をいふと不実の庸医が適当の薬方を用ひず只枝

今世ハ盲醫盛ひまゝれこまざる盲ひろがる由ハ自族の輩まで これを知らく一向の毒薬なりとおもへり悲しむべきの甚きふあらずや若この軽粉生々乳等の加減の法を知らくこれを用ゆるときハいかほどの痼疾結毒なりとも忽ふ治すべきなり故ふ予ハこの法物を秘く黴治必用の方剤とし抑黴毒ふ軽粉生々乳粟なと用ひずして山帰来の愈ぜざることのよハ何とめつく治ん治すべきや偶其害あるハ盲医の外治なり薬の害よハあらずこれ又奸医の妄言を聞く軽粉生々乳と謗り病家を迷惑さするがでこれハ霊薬の流通をさまたげ治療の枢機をうしなふこと甚だ罪甚ずさ太ひなり病者よくこれを考へく軽粉等の偏害とさるれハ全く盲医の過なることを知り奸医の妄言ふ迷ハざる事なかるべし これ

の疏意を耳近く世人に告示さんがために病と薬との懸不敵と軍の勝負に喩へて方剤の加減を述べ明に之を書所熟讀する時ハ自ら薬治の逕庭を諳んじ知り膏肓の誤治を免れ奸医の悪計に陥ることなからんことを予が済世の微志なりと云尓

天保九年戊戌六月　　船越晋識

凡例

一 此書ハもつぱら通俗を要とすれハ文詞の卑陋ハ勿論假名づかひの違ひ等多かるべし看人これを察せよ

一部の体裁全く小説軍記に倣ふ史に交戦のつゐゆひ縦段の
状病某ね攻るふ過ることありこれ戯著の常体なり

一流季の稗徒奇怪のするに遊ざれバ悦ばれ故よ今も稗闘有
行ハるゝ三国妖婦伝するものと仮て見ひく悪獣の怨念
纛毒王となり雷震等の神霊延寿丸等の業とするや
いふごとくに妄延の上よ妄延を加ふること全く附俗の悦びと
激くるの書所襲淡せしめんがためふして奇怪と述る
とるく将意とんるふハ邪ど

一毎国病職某軍と配当とるものハたゞ其大概に従ふ
強く株を守ることなうき

醫官篤實淳直
いさんどくじつじゆんちよく

病賊 黴毒大王
びやうぞく ばいどくだいわう

藥將延壽丸
やくしやうゑんじゆぐわん

藥將治瘡丸
やくしやうぢさうぐわん

藥將奇良湯
やくしやうきりやうとう
藥將繖劾散
やくしやうさんがいさん

繪本徽瘡軍談目録

巻之第一

巻之第二

試舌戰國王授任
挫奸謀賊徒伏誅

卷之第三

襲敵陣遺毒喪首
失本營瘰癧騙迹
血熱敗走黃泥阪
下痳滅亡陰頭山
養元氣藥將緩戰

拒鋭鋒病賊殞命

巻之第四

黴瘡軍談巻之第一

伯州米子船越敬祐著

醫生燈前見妖婦　天神斧下退魔魅

夫天地の間物各相對あり所謂天あれバ地あり陰あれバ陽あり暑あれバ寒あり男あれバ女あり乃至善悪邪正ことごとく對待せざる事なし其中薬と病とハことに敵對仇讎の者にて薬あるハ元の病あること也上古にハ疾病少けれバ薬方亦少し末世になりて疾病多けれバ薬方亦多し蓋黴毒の一症ハ古昔此病なきこと也元明の頃より此症といふ者あれども其治術詳ならざりし明の陳司成なるものありて黴瘡秘録を著し治方

効験を挙ぐるの精義且病源を論じて嶺南の地より説るといへ
ども其より以来相継いで是を論ずるもの多しといへども未其的方を得
者とてハなく又篤実淳直といふ者ありて黴毒の治術に心を尽
労し博く究め善術ありてやゝ其方を自得し[illegible]の薬剤を
製造して是を世に弘むといへども世人皆庸医の言を信じて
軽粉生々乳の劇剤を畏ず請るものハ多く己して用ひる者ハ害
おゝり淳直ハ惜きことにいひ何とぞ無双の妙方を捜り出し黴
瘡不治の妙を発さんと人を避て一室に引籠り広く方書を
研尋して殆ど寝食を忘れるに至る病疲いつものごとく残燈
の下に独坐し思惟沈吟する所に忽ち一陣の冷気肌を侵し
て人の歩を来るけはひす淳直ハ不思議に思ひ眼を定むれバ

見上れバ一人の婦人鬢ハ二八ばかりにして白毛の乱丹花の唇眉ハ三日の月よりも細く腰ハ二月の柳よりも嬝なりけるが黒髪を緋の袴の裾よひえくともと拝り出でなさ吾一つび顔ハ城をも傾くべし二たび顧バ國をも傾くべし嬋娟窈窕として百の媚ありまかざしたる檜扇の陰より慇懃寔に莞尓とゑミひ妙なる聲をして汝ハよも我を知るまじ我こそ日比汝が攻戦する黴毒の精是なり我毎夜汝とあらそく汝が此あいだの結構を知りよりて其利害を説き既に及ばぬ企を止めて元益の苦労をかさしめじと思ふより姿を汝にあらはしぬ上の妙葉といひ皮膚し抑乾坤冥霖の附泥泥の一気そもそもなりと清く軽きハ昇りて天となり濁りて下り降

凝りて地となり中和の霊気は人となり由縁の濁気は禽獣
となり其内に不正の陰気の凝る所にして開闢以来年数
を経るの計べからざれば終に変じて金毛九尾白面の狐となる
神変自在おのづから具り宇宙の間を飛行して至らぬ隈も
なく三世の外に遠く徹して知らざることなし元来邪気の凝結
する所なれば太極の一理に叛するが故に悪念漸く萌し発
まづ世の人民を殺し尽して一切国土を魔界となさん
ものと思ひ立しが先唐土に至りて殷紂の時に当りて冀
州の侯蘇護が娘を殺し其死骸に入かはり紂王の妃妲己となり悪
虐を勧め政道を乱し諫臣を拒み忠諫を斥け殺し
酒池肉林の歓楽を窮め炮烙蠆盆の厳刑を制し[illegible]

と羑里獄に收囚し妻皇后を摘星楼に鄭殺し伯邑考を
殺して其肉を醢にし王子比干を囚て其心を割て罪なき
を殺し孕る女の腹を割などして其数をしらず此のごとく世を乱し人
を殺して我が名を成就せんとせし所に西伯姫昌の子発一たび怒り
て天にかわり民を弔ひ無道を伐の兵を起せば呂尚雷震殷郊等
の英俊是を佐け天下響のごとく應じて諸侯期せずして會集
数万の大軍向ふに敵する者なし都城も既に攻落されて紂王は鹿
臺に焚死し妲己も雷震に生捕れ刑を斧鉞の下に受られども
本来は術に抜け出で唐土に徘徊せしが周滅亡に新にして
國主賢臣和合してあれば其間を伺ふ事能はねば遠く西天に飛去
華陽山の麓百姓の女と生れ宮に召れて耶竭陀斑足王の妃と

ありて主上を蠱惑して法の悪事をなさしめ此國より佛法を破り人民を殺し尽さんと先ず僧を捕まへ徴殺させ又百王の首をきらんとせしにこれよりさきに普明王の法徳に我が妖気を折られ瘤を受蒼婆が珍縁に平仲を探りあてしまた金鳳山より薬王樹と捧り来り菊を以て與し故に苦痛まさりて堪がたく其宮中に三尊の影向あり佛の威光我が妖邪を照破し忽ち寺祠と放され纔に命からがら遁れて飛さりけれども天竺へ帰るをかなはず夫より日本に飛来り堀河院の北面坂部行綱が女と成宮中に召れて鳥羽院の寵愛を受玉藻前と呼れけりいかにも日本を魔界となさんとおもへども神國なれば人の心上下ともに正直にしてたやすく悪行動ることを得ざりしが天子の命をとらんため望

統を絶して世の乱を引おこさんと玉体を悩し奉る所に安部泰親
神筮を以て我が妖邪を知り御悩平愈の祈を告し泰親に
府君の法を修せしめ又悪狐の本体を顕されて大内を去て下野国
那須野の原に隠れて人民を魅殺する事其数を知ず此趣
聞へ勅命によりて泰親再び調伏の法を修し給ひ三浦上総の両介
那須野に赴き向ひ四方を囲て攻立ければ飛行自在の術を得るといへども
調伏の法に通力をとゞめられ武勇の矢先に射殺せられて数万歳の
寿命一時に亡び屍を野上にさらされけるが悪魂は猶残りて殺生
石の名を付毒気を吹かけ人畜の命をとる事其数しれざれば
も程なく玄翁の禅杖に砕れ悪魂一たび飄散せしが唐土霊魂の
小柴あまた再び集りつゝ思ふに有待の形を得る時は忽滅是乃

とあられハ又石舎元周黴癘新書と著ハ文化年中に石
橋忠庵黴毒要方と著ハ松田立卿ハ黴瘡新書を
著ハ其后諸家の著述多けれども何れも実験究理の
書にあらず学者どもの著ハ求なれバ思ふに只ハ陳自
成我か眷属と攻めくおくの勝利となる黴瘡秘録ニ兄治
の功能を誉といへども我ハ毒にて往変不測の眷属ほし若兎角に
出逢ひたる时ハ陳自成も治なるれに御なうかん又五宝丹出会円ハ
あられれの良方なれども兎と角ひく速効をえることぞあらう
又病に癒えざる者ハ効もなく既に費ハ己に独慵庵が黴瘡口訣
にも五宝丹を練まで肘独慵庵ハ我が恐るべき者なれども中年
ふして世をさりさり橋浅井が此輩式八一旦の偶中とといひたのり我ハ

淳直書室に妖婦とまる図
雷震来つて淳直を助る図
書籍
書籍
書籍

ぞうぞくつう
らうしん
おゆんちよく

无験の空論なりとそしれバ今良沢杉田がごとき人ハ博学
多才にまして紅毛人の窮理と学びより夫を書物にかきあらはし
たるまでにてはさらの用にハ立がたし但し石橋ハまさに乳の
効と称じ頭痛症家みなしたぐひなれども治方ハ却て解遅
是迄我邦に欽する者世の人の病を憂ひが為に全治の功をゑ
ざるなり爰にもいふごとく服散陰顕の妙と奥義に分け入
九竅と唐めぐり作病作ての三世に在るとすれバ彼にあり
或ハ新治ともよせて年数と考へ再び発るかくる自在
の我れなればあらしめる名医が匕となげ舌を出さくも理すらば
やまふ不治なとましてば徽毒と亡さんと法家に辭をもて見
とましくありもせざる方策と尋ね治術工夫にも何号ぞ愚の

どうりて殷宮にあり我が兵を知るが由へに今猶畏なくと
此の臣我をハ今天界に生れて帝宮守護の神將となり神通
と汲く今雪先生の危難にあふを知り態と来く邪を死と殺ふ
是皆因縁あることなり緩に臣く統先臣今先生を存邑
て彼悪霊主属が所在へつきゆき其ありさまを見届せらる目棲
ねずとかさらんと欲し我臣に讐てもや来主へと告くとせりされど
淳中ハ再縁しかさねくの頓ありいぞ仰せに應らんやさしが頓援に
消ふべしと立上りてこそくみづから纓の袖にとり付くと片ほて汲く
其を引つけ片ほて挙くま待くれそさひ紫雲再び翻ひさがり
二人の侍と引包み清風颶くとして脚下に起り雲を吹上げらたる
びけ虚空へろうに登り行く

會郊野群邪議事
變形軀五傑應募

かくて五人ハ雲に跨て風に御し其疾きこと矢のごとく須臾の程に
数百里をはせさり風も荒ぞぶへしつべなるひく雲を踏とめて暫
息をつぎ居より仕付もうまき道行に淳連ハ國の根も合ざれ
若もこゝから路をそびてハ愛宕山の土器投轍塵にうおるハ鶯迄
あら恐しと思ふ程肌粟立ち侍るひ息を殺して雷震が程の
袖のちゞなるぞろ継り先きなるありさまハ龍の尾につく驥の首
縮ふ髮髻なり雷震ハ淳連と弓手の方より迄先生を招る
まづ立とまり雲ハ我が乗物なれば路抜気ばらひ蟄とも此下に
そ彼悪霊の主領眷属集りておかさらふ知る所也ぞ門かて

見聞し玉へといへればくまなく心づる程の袖ハ離世が従捨官
ハ定まりし乱雲震に帯と占しせしく雲の端より邪気出下界
遥に見おろせバ如何国とも知らねども蒼茫たる廣野の上に幾
簇の妖気集り中央にハ黴毒主と覚しく黴毛の衣冠を着し
威風堂々としてあたりを拂ひ座をしめたる傍にハ眷属の諸大将
上疳結毒を元じめとして結毒癰疽癧瘍下疳遺毒疳兼瘰癧
疳瘡痔瘻痔漏便毒疳瘍楊梅疹瘡廣瘡下疳早成骨痛瘡
肉下疳疼淋病出来疹疥瘡疹癬等うんど一族郎等その身
ども皆各数万の眷属とひきつれ或ハ青或ハ黄或ハ赤白黒色々
さまざまの装束に出立て列を乱さず並居たり時に黴毒主勿
元来し我主と汝等と共に此日本長崎丸山の娼婦の人体に

胸中に思ひへりさて汝等をさそひ金を以て忽彼が家に出ぐさり積の飛ハ遁したり程なく彼一家内乱起と変りし者黴瘡を発せざるハなく或ハ下疳或ハ便毒或ハ楊梅瘡或ハ内下疳或ハ蝋燭下疳或ハ袋下疳或ハ淋病或ハ筋骨てまといたみ鼻腔に苦痛に腐爛して膿の流れ出で疵ふかくなりてハ骨をおかし或ハ黴眼或ハ頭痛或ハ温熱にふり所めらるヽ或ハ皮癬雁瘡に皮膚をやぶられ或ハ咽喉腐爛瘡痛を以て食道の通路を閉らるヽ或ハ痔疾肛門腐爛疼痛とのつく大便の通路

淳直雷震と魔所に至る図
けつぞくあんぢ
ひぜんきこは
上こうけつぞく
らうそくけうん
がんざいへうね
まいばんひりく
大王

ろいれきえんらう
べんきくえんらう
ちうろぢちらう

と悩さま漸くに身体羸痩し飲食することを怠りけれバ是より
労瘵の症と形ひ肺の経の邪気せめて候と生さが脈劫無力
の症とうり何までも亡び失せんる遠ふはあらバかく一時ふあまる
乃人件ひと亡さんハいと悵きるふあらバや自然ふハあらねども
皆我が方寸の裡ふ生ずり渉るも危くせめて此上ハ大戦場を方
るの事と言の下より上攻結毒列と出ず座をとて称せ
の為畏まれりまるがら家人侍生の主人公是を「獲剣の
弱将と用ひて効うれと憤り必死ときハめて刺療功の新ふ
と入まくへ破釜焚舟の勇をとるさバ健方きき難症とうらん
大主の良策あらバわらじめ覆らん各いろふとりんくまバ残
其の春扁口所そろへ上攻結毒の言のごとく後日の合戦ふろ

かの昔殷の亡びし時悪狐は潜に援出で西天にわたり華
陽夫人となる是ぞ我〻は亦生れ変りて普明王と
なり我是は誉褒と成り天竺に於て再彼と追退け其後
日本に渡ひ来り吉公望は安部泰親となり我是は上総之介
となり殷郎は三浦之介となり伯邑考は宗須八郎となり
遂に悪狐を亡し畢りぬ此のごとく彼と我〻とは相剋の性
にしてまく世〻迹を追ひ敵対せられ仇ある臣し先生も
前生は武吉と名づけて漁をする人を殺せしが吉公望の教に
よりて命を助り其上周の武王の臣となり殷を征伐の時も
我〻と共に臣して功を立てたり其因縁にて今は医者となり
悪狐がなりたる獵毒を筆ごを取る不攻我〻も共に我

政事を救ひしもかゝるいとまもなかるが為なり彼今ハ先非
の悪癖を知りて人体に潜み隠れ長く我が輩の害を覚
まなりと思へりされども我〳〵ハ天界自在の教をうけ出没
変易心のまゝなれバ今より奇効の薬軍となりて人体に
入〳〵彼悪徒をおさへん先某ハ延寿丸となり殷郎ハ微効散
となり辛申ハ治瘡丸となり伯邑考ハ奇良湯となり右
公受ハ神妙をもつて先生の教をうけ惟策軍散
を助く我〳〵力を勤る程ならバ大毒をみなごろしにせんこと中也
物をなさんより易し久しぶりの腕なればあつぱれの腕さすりせんぞや
く述の来れうしと詞もいまだ終らざる所に下界の方より白
光がゝやき一箇の神人白雲に打乗り虚空に浮び出で前に来り

恭しく再拝し某ハ福徳自在坊といふ者の人躰の倶生神なり我が国の主人公愚々しく黴毒の悪魔に欺し変化の美女と交りしより一旦忽ち黴毒の賊軍に侵され其外の属国も彼美女と交りしハ悉く黴賊になびかう憂苦となるの輩久しく悩める主人公対治の策をめぐらせども才とあるの能なくして庸医の言に任せ堕弱の君剤を大将とするが故に諸道の戦ひ味方一度も備を立られん危きの旦夕に迫り我是を見て見るに忍びず吾等の倶生神と心を合せ主人公と説きしかバ先生を迎へ軍師と定め彼悪賊を追討し寡君の元帥としてたらんと卿く揺伐して某に至るまで立てり冀くバ先生労を辞せず此事に入らせ給ハヾ幸甚し

からんといふ詞も殷勤なり淳于は雷震がいふ所こそ適當なれ
ハ少も疑ハずして神人に答謝し仰の趣承りぬ僕軍師の才
なけれども幸にして呂尚雷震等の扶あり彼朋輩と共に貴
國にいたりなバなどうしも強敵とするにたるべしといふと雷震聞て
て心易うそ是よりともに諸大將と呼びし臣一如く御前へ出仕らんと
いひさして立上り天に向ひて指まねけバ恰も流星の過るが如
く忽然として數多の天神雲の上より飛來り先に殷郊
其次に辛甲其次に伯邑考が一下りて太公望武ハ甲冑に
身をかためる武ハ文官の装束しておくりせがしと立ならぶ雷震
ハ左右を見まハし人倖中に向ひんに此形をへ付に座うしたる紙をとく
くへ遣ばし先生よりそうじるまへと淳于が口の中へ手をさし

手がれ一日もはやく凱陣せよとしきりにいへと雲にまぎ
がりての虚空に飛去ければ倶生神は指南まで擲ひも
ようひし智者勇将欒毒と亡さんと讒よりけるは見る
おもし用意よくば打立もへ是るべ仕らんと云を嬉び
風俗紀し生光に出立ば五人の神将へ其旅に去るがひ
人件宝へとさしけり

鐵叢軍談一之巻終

黴瘡軍談巻之第二

伯州米子船越敬祐著

試ニ舌戦一国王授レ任
挫ニ奸謀一賊徒伏レ誅

昔賢の曰る言あり人身ハ一箇の小天地なりと称人体ハ悉とつてハ其方続よ五臓なれども万物悉く備り乾坤陰陽の理一つとして大事な光東方よハ肝の臓と云ふ数ありて青と本系まづ一切青色の物を貴び其食ハ酸きを好む筋爪二度を管領し膽の腑を友配し風事なき土地なり西方の数を肺の臓と云ふ秋と金とをまづ一切白色の物を貴び其食ハ辛きを好む皮毛二度を管領し大腸の腑を友配し乾燥の務をて

る土地なり南方の赤を心の臓と云ふ夏と火とを主どる一さい
赤色の物并に其食ハ苦さを好む血脉二つを管領し小
腸の府を支配し温湿蘊鬱の土地なり此所主君にして主人公
在ハ北方の黒を腎の臓と云ふ冬と水とを主どる一切黒き色
物を并に其食ハ鹹を好む骨髄歯牙の諸を管領し膀
胱の府を支配し寒気を主とる土地なり中央の黄を脾の臓と
云ふ土と土用とを主どる一切黄色の物を并に其食ハ甘さを好
む肌肉二つを管領し胃の府を支配し温湿の土地なり中
すべて九門あり眼耳鼻各二門口門水ス門穀ス門なりかくれ
如き人体同其数无量无辺にて其中女子男子の別あり女子
ハ男子に随ひ男子ハ女子を恵む女子を陰とし男子を陽とし陰

陽二気和合して又気を生じて止事なし一気毎に定劫ありて
劫尽ぬれば滅ぶ或は百年或は九十八十年ありて七十六十年
を一劫とす而ども病と云賊ありて気を侵し悩し征討
度を謬る時は劫滅を待ずして亡る事あり文士君子の
差別あり士気の中にも学林経籍を通ずる気あり勇武経
才を勤る気あり医術方業を事とする気あり君気は一の
不同あれども大概一列に力作を以て勤し工気は工匠を勤し商
気は売買商を勤めとし又其中に貴賤貧富強弱等
の小別れあり而ども各気淳朴なりしが漢末に至りては気風漸も
衰へ士君子動もすれば自気の勤めを怠り貴気は驕奢
げ富気は奢気は賤気を侮り強気は弱気を制し中にも医術気は獲

賊を追治する事をしらざれば其任最重きことなり主の主人
公賢明なれば将軍と良臣のぬくに使ひつかふる悪賊をも討亡
し病主の太平を致して後病主よりも之を賞し祝禮を
厚くすれば自から良将の憂ひなかるべき事に近し医主
まめかなる不忠にして雑兵婢僕を以て富貴の主に媚諂ひ侫吏
主も亦之を寵し医将軍法に精しからざる者にも病賊追討
の任を与へて猥りに之も小ぜり合にはよければも一旦病賊の大寇に
逢ときは堕弱の補剤寸功を奏せず忽滅亡する事を数を知ら
ず凡不実の医主は病主の機嫌をとる功あると知るなかれ
瞑眩を恐れて勇猛の劇剤を用ひず堕弱の緩剤をうけて
戦ひしめ若経よく戦ひ勝ちても軍功を得るによつて軍利なくして病

臨運の喜び是に過ん去ながら爰に一ッの疑惑あり我が曹
先生と汲々大元帥と仰んと欲すれども先に元帥たる医
王主毅員先生を拒んで彼ハ寫虫丸の軍に加れず徽緘退
際の元帥の器に非ずと罵る文丈ありさるに今度ハ先生彼等と
一同蒿して我々が疑ひをも晴さしめんと云ハせて淳虫壮丸も凝宜
然ん某已に招きに應ぜし何ぞ貴君にそむかんや諸元帥と意
財のあるへなよう緒々不承なりと答ければ丸主やがて令を傳へ大
元帥副元帥并ニ外軍将を招き集むにも而ハ山井養民社
良棒居毅井付居寺鎮書吕仙我久井須加丹滑田順文不
実貪欲口利功庵不学無功等の医術丸の主人を何れも當丸
主の家信する所なり陛下にハ郡下の軍将山飯来剣五宝丹

紫金丹雞汁飲を始めとして捜風解毒湯清府敗毒
散竜胆瀉肝湯防風通聖散荊防敗毒散六物解
毒湯通天再造散芎黄散伯州散反鼻丸五三膏無
三膏万能膏赤万能膏黒膏紫遊功紙其外膏薬附
薬洗薬蒸薬其外薬将三百余員数々として擁列す
其附従生神は座中とみて入り各知りつゝ徽軍強
して王家危く王公の憂若干孫子医各の軍苑かゝる
ふはあくぬぐも未平治の萌しとうるよりて秋と主公とする淳
東君と伴ひ其の元帥の任と与へ臣毒風高の記天王と大将として
勝を出て我は志めんと欲ス先近のめく六物解毒湯捜風解
毒湯忌名蔵菜或ハ五宝丹紫金丹洗薬蒸薬其膏薬

黄連を用ひて城を守りて徒に日を送るは黴瘡防方と侮り又五臓六腑に設
へり次第に身中衰微して精力ほき滅亡指を折て待べし未だ
家の勢ひ盛なる内に延寿丸治瘡丸黴動散奇良湯等の
神将を用ひて手ばやの一軍にて肝要なり人々各兵あるべからずの只
へと云ふを列座の内より無用なく大黄必須生神将が好みを信ぜずみだり
に又梅毒医ご暴将を用ひ又は止む事を得ずして用ゆべきものは
奇良湯一人なり延寿丸黴動散治瘡丸の三人は勇猛の大将
として運薬を梅なれば梅毒といふものありて黴毒を防ぐ事平かにて浚
却て出家とあやまんと黴毒又もとぎたり必ふ又従生神将瀉出と
心を合かくのごとき猛悪の梅将を用ひ表は黴瘡を討を名にして遂
には出家を棄てんと欲し彼等こそ叛逆人の張本なり今黴毒を

國王
近臣
淳道

自在王門國ふ淳直諸元帥と軍術を論ずる圖
養仙
須加丹
貪欲

土茯苓山帰来を以て要とし此故に余寿星湯一剤を用ひ何も此証
なき勇将なるが故に余これを以て回天奪巳経の策を以て是が助けとし
凡黴毒を表迎すれ此回天奪巳を用ひてるのたるなり他の方ハ撥に臨み
変に従ひ是が加勢となし抵也又黴毒対治の実験あり延寿凡
治療ハ黴動薬の三大将を用ひて合戦に及ぶ時ハ黴毒賊徒
の五臓六腑骨髄に攻入たる者も散乱して表に遁る所ある不
は日月ハ漏を遁し捷を生じ猶汁出るのあり是黴毒賊徒を
駆除きて孔因とあがるが故なり黴賊逃去るにあさがひ漏さう
猪水つき痼愈て太平となる又兎ありてハ内にある黴毒延寿凡
ハ治療凡我ハ黴動薬に攻立られ表に出て熱を遁し逃を遁し呼五
日まで逃去るありて是を以て之を見れば黴毒の遁るさ深業なり海ながる

如き者ハ水銀を以て一向ニ云々薬と思ふことを拘じるもと薬ハ製法に
よる者なり米と糀と水とを製法によりて甘酒となり醪となり酒
となり焼酎となる此四つハ冷水を以て造りても熟する時ハ熱を帯ると
なる酒等ハ冷水と米とを以て造れる酒も元薬とする延寿丸治
瘡丸散剤等ハ三将と余ハ温熱の発表剤とれハ三将の武勇
伏病を破り黴毒賊徒を駆除するの神の臣金方に今世医の
なる本とされたとへバ下疳楊梅瘡或ハ骨痛或ハ筋痛或ハ頭痛或
ハ手足胸背腰の痛或ハ咽鼻等の痛ミを治の劑薬を用ひて
大効とあらバ外にあらず本の底或ハ腫或ハ痛をさへ治すれバ
病根ハ残たる根を思ひ未黴毒つきざるに大切と思ふる薬将を毒あ
薬毒をぬくと称して山帰来剤を用ひるハ大ひなる誤りなり

彼薬毒が人神其中何の所に止るべきやしらざる所を余いまだ知らずいはゆる薬毒といふ者ハ薬能ありて一切の薬毒なきへ返此毒能病毒と彼る病のためにハ毒返て人身に害ありてハ薬能と云ふべし又劇薬を用ひて口中いたくさき涎沫を出れハ口中よりよぶれまつハて薬毒ぬけるが故に薬毒つきるにおよびハ口中治れ若薬毒のこれバ口中も治せざるあり黴毒ハ他の病と異なり容易に抜去る者ま難にあり宜をたるところ一旦治したりともたゞこれ草の冬枯するが如く其病根五臓六腑骨髄に入りて薬毒つき精氣損し病毒をたすけ不養生する時ハ又あらはるゝなり然るに延寿丸にもせよ又ハ治瘡丸黴毒散奇良湯にもせよ其のうち効をと得る者ハ久く服して病根をぬきさることをなさゞれバ黴毒再発す

る時ハ薬毒と名づけて療治を誤る若薬毒臍中に残る者あらバ
黴毒の薬のことハ前に論ずべし凡大黄を用ひたる者も大黄のごとく
腹中にありてハ腹痛と大便下利大黄の毒はきさしハ腹痛も
下利もやむなり後日にいたりて大黄の毒再發腹痛大便下利べ
きや黴毒の薬も是等に准じて知るべし病毒とともにたくハへ薬ま
肉にくらせのはきたるほど退とするハ薬のほどくらせのすくなきまでこ
中とせざれバ其功退延寿丸の如き勇武大将も病症に施ど
大功を立ることハなくども半途にして止めらる他の薬を用ひらる時ハ
病根ぬけざるなり口中てやむ者ハ口中治るを待て功ありし薬を
譬バ疵のあと同くなり或ハ筆の多きにある迄用ひなバ十に八九
病根ハ抜去ん若万一再發とゐるのもあらバ其時又其薬を用ひ

必治の効をとくべきのこと良薬将を用ひる方法も知ざれば実病を
治するの心なく利欲にかゝり病者の意をとりて奸言を吐くもの
拙庸医は非にして何ぞや今も我が国天下に延喜元暦の武
勇をたのみ国家を害する逆徒といふ昔時日本武の尊の武
勇同朝の病たる熊襲を殺し樊噲が武勇鴻門の会にふるく
漢の高祖の急病を救ふ平の貞盛藤原の秀郷の武勇を以て
天下の大病たる平の将門を退く此等の人悪徒のためには大毒
なり主君のためには良薬なり海宇を安んじて病を治するの薬能を
薬毒として是を施し国を助るの良将を除かんとするや医門の
罪人国家の奸賊なり此二人を追殺し国の蠹ひを除きうへ
と制するどれ云ひまなつ此二人は人体に主たるとびへつらひ義を定る

者たちれバ主人公これとこう医先生の怒り理りといふひちふかう
今徽毒賊徒の為ふ虫家とちやまされ是を破るの舟宝丸中
ふて伊ら方の円丸あらバ不吉なり軍おさまる近来人の罪を向ひ
来へと云ひけれバ淳並も怒りを抑へ我が軍おさまり後必ず一統
ふ耳鼻を守り虫境より追拂ひ病虫とまよは医臣よとむく者
のみせしめふいさんと云ひすてく再一座を向ひいるよかくさうバ口を
閉ていぞ非ふ服したる各不存と服し来へと志なバ已上て列虫
の中より口利功庵進ミ出て某一つの不審あり丸猴熊剣峨業
主乱をつひろどころ志すかるやう剣等の大将と思ひ或ハ山胡来
剣血宝丹紫金丹雞瘀發水銀丸等の大将と思ひ一旦ハ徽
毒賊徒を攻破り虫中ふ太平ふなるといへども不肖ふ五名の賊徒ら

用ひるの法よろしく軍配のよろしからざると六韜の行ひ過しか
らざると医者の拙りて兵将を謗りさまたぐるとおなじこと其人
未だ治法発けざる故なりと云ふを聞より我久井須加丹後を
左右にありて中間なりがたしと云ふべきものあり足下の論ずる所の理
まあるといへども治法未だ発けずとは何ぞや其云や我が東洞先生
初て古医法を発明し扁鵲仲景の深意をさぐり知り傷寒論
金匱要略をよみもときぬまた続て南涯先生気血水の論を
吾日本はおろか異域迄も其名を発し感服して紅毛人も東洞先
生類七宝を工夫し経験剤を用ひて効あらざる所へ用ひ効あるに
紅毛国のそうぴらと同様なると見えて言を全くて大なる尊信す我が
東洞先生は天朝名医の聖賢にて是より治法大にひらけ病

の至理と知る足下も東洞先生の道と云て治術を行ひながら論を治法辨げずと云ふや然ば傷寒論全なりと云へど淳熟ハ未究尓と笑ひ足下の言のごとく東洞先生より古医法ひらけ今天朝の治術三都ハすぐれたり然ども此徴毒ハ遊世流行の病且て東洞南涯の二先生も未此症の詳なる事ハ論じ玉ハず其が治法辨けずと云ハ雑病の事に非ず此徴毒一證の治法詳ならざる事を云へるなり此徴瘡貴人なる家に稀なれバ天下の名医も此病の治療に骨を折ざるが故に其奥ハ稀なれ出空論安談のミにして患変の治術薬方の加減を委しく出たるハ一つも無し凡天下に水火など玉家の助けとなる物ハ無し又能生家の害をなす者水火より大なるハ無し薬も又左のごとし

國王
淳直
近臣

延寿丸徼劫
散觪と貪欲
の両魔を
殺す図
延寿丸

加減の法を知らずして是を用ゆる事不足なれバ病毒を深くして
緩急遅速を失ふ時ハ却て害をなす此薬の要ハ加減にあり東洞
南涯の二先生の如き後劇の薬方を度に適ず當時に於て
効を得る人あれども只これ自得の妙にして後世の為に準縄と
なるべき書を遺さざれバ何を以て徴證治術の指南とすべきぞ
やこの故に治法未定けれバといひしもあり今足下の此の中
續七寳の效文を挙て是をもて薬毒織に毒を以て去家に毒
せざることを歎くべきことあり日本古今の名医たる東洞先生
軽粉丸の能五宝丹にまさるかにまさるを以て軽粉丸を七宝
丸と名づけしよりして七宝丸の智勇の及ざる勇猛強織
痼疾結毒にハ續七宝を以て大将と自若として左に用

後又黴毒と称して山帰来剤を久服せしむる者数月の間
に又逆症蜂起して五臓を悩まし乱世に出るは何ぞやと問へば淳
直言有て臣下の臣たる本意又世上通貫の要論なり殊にも
云ひしごとく黴毒治するに至ての徒論にしてあらず然
ざれども世上一同に是を信用し適当の薬と極めて山帰来とて
用ひ服して黴毒を抜き残す故に病毒再発するなれば
迄も適当の薬将と用ひて病の残党を殺し尽し彼黴
賊は不剛の術を具へ軍旅として什は用ひず府は或は毛穴に隠れ或は
骨髄に隠れ居て時節を待ち其虚を窺ひて時は本の如く国中に
はびこる実に稀代の逆賊なり此黴毒まづ眷属八万四千の
中に一騎当千の大将数十人あり就中治瘡丸延寿丸黴

勤發の智勇に勝る事能はずして寿良湯五宝丹紫金丹鶏麝發鶏汁薬等に勝る者あり活蘇丸延壽丸黴勤發よ雖勝といへども寿良湯五宝丹紫金丹鶏麝發鶏汁薬等に勝るの能はざる者なりそれの合ふ所ありといへば延壽丸は智勇をもつて戦ひなば十に六七は必勝つべきこと区故に延壽丸の勇智には黴織ども香を指して医師す黴勤發紫よも痛織等の畏る事も過活蘇丸どろまんかつから剤この三人は同様の智勇なればこれを以て戦ひ十に三四の勝をはるゝ事必定なり故に是又織徒の恐るゝ所なり寿良湯五宝丹紫金丹雞麝發雞汁薬此五人皆山海其の雑を以て主とる故に五人の勇智同様なれば寿良湯を以て戦ひるば

風ハまたやうふれバ帆を下げよりち朝きの風ハさげ帆をさき抜帆と互
合におちと定め帆楫の加減をもつてすれバ船ハ恙く破損
なし海鄙郷野人の小業とて強く用ひ十方人をハ手よりく用る都不思
への病の猛勇なるハ弱國中も劇薬を用ひ病の弱きハ強壮
にも緩剤を用ひ人の体性も生の命のちがひ一ツの如く同病たりといへ
ども同業を施して投のがたき症ありまつて緩急去加増減の
匕加減あり海土がなきハ彼偏頗の者に似ることある異ふ
らバ医者に似て医者に非ず則ち兼に似て兼にあらず只
無益の巧言をせき病虫を速ふなをりやすくして強敵たる大病を攻
破る事又思ひもよらぬ面の皮あつく世席に出てよくも口をききて
のうまなる家医論をとなへさんとおもへバ先古今の虫をうえて再び

本をと以てバ一言の返答もなく恥辱にや堪ざりけん退きさりて
へく嵐の如く逃去りけりおもんみるハ薮井竹庵寺領某仙坊
余等我く猪虫の合戦のありさまをみるに元来杜律なる
人徽虫徽毒に惑ハさるゝ事常に雅熱するに當りどもの疳瘡
或ハ七宝丸を用ひて合戦に及ぶに忽歯齦腫口中爛傷して倉
まるの難に或ハ斑毒を発し熱を発し或ハ腹痛下利し徽毒
ひ破れて逃去るものあり或ハ此の如く眼瞼すれども徽毒少しも
ひろまだ某将猪利を得ざるものあり又元来虚弱なる人
徽虫を徽毒につゞのまのせるの所に腹痛二度に當り候ぞの疝気
をぼく合戦に及ぶども口中つも痛ず発熱発斑もなく腹痛
下利もなくして徽毒大におさまり逃去るものあり又徽毒自若

将瘰癧腫高
病将遺毒抜兼

荥軍毒霧に苦しむ圖

上て逐去ぐれ豚丸薬を加倍して攻討ども亡も動かぬ毒もあり
世医の論ずる所ハ口中より涎沫の出るハ黴毒骨髄に深く
侵る者軽粉剤吸薬ふ於いてそれを骨より避るの病筋なく
毒ハ骨よりさへるのちとハ毒根より涎沫に射てぬけ出るもうと
いふ說ゐに涎沫出るといへども黴瘡退かざん或ハ涎沫出されども黴瘡退
き一様ならざるハいかなる理ぞ又五宝丹雞麻散雞汁蒸山
帰来剤吸薬軽粉剤をも乳そうびるぞろ志んかるゆへ劑留
を用ひて十の物ハ四退治し今三つ四なりて治せざん者あて数日
合戦を及ぶ内ふ次第ふなとめぐりして治せざるハいかなる故ぞ願そ
ハ高論を出さんと温和の導をこなふも今に一笠下の間ありも
研究のちゆたら凡人年来の瘡痛瘡癬の極意をかくつらぶれ業躁

眩の毒同あるハ生まくの生質よる薬の瞑眩ハ酒を催して知れども
そこゝの軽粉を服て大に瞑眩する者ハ酒を合て服むも大に酔を
発するごとし軽粉二分を用ひて口中にはまざる者ハ酒二升を服で
も酔ざるがごとし又軽粉の数を用ゆるに大に瞑眩する時と又瞑眩
のなき時ありこれも酒のむ人の能酔時と又酔ざる時のあるごとし或ハ
劇剤を用ゆるに初めハ大に瞑眩し續て数十日用ゆる内に次第に
瞑眩せざる様になる者ありこれも下戸の酒を飲になれてつひに上
戸になるがごとし又必口中爛傷して涎沫を吐ざれバ黴毒さらざるを
いふ者あれど口中腐爛して臭き涎沫を吐くハ薬毒の抜いづる
ものにて黴毒のぬけるにあらず此数に涎沫出るとも黴毒治せざる者
あり涎沫出ざれども黴毒治する者あり凡黴毒織徒ハいづれもとより

逆ぎると云ふことを知らずして此者發表にて治することもあり吐下にて治するもあり或は吐下發表もなく消化して治することもあり峻劇剤を用ひて發熱發斑することもあり自下利することもあり或は何となく邪気あしく不食する者もあり是も薬の瞑眩よりなることもあり此時は邪気の變じ易きを見るまで合戦を為すに一度諸方の兵ひきとるのへよく食せざるに至りて又前日の某将を以て合戦をなすべきことなり其後初の一軍にて必勝を勝ざるを継く見分而して后敵を下凡合戦は先敵将の智勇虚実をとりて其手あてをなすべき大將を擇ミ其時の變に應じて戦はざれば必勝の理はあるべからずなどへば徴効散なくして全治するの理は治療丸を用ひても延壽丸を用ひても其は不治なる様なれども適當の薬をもつてすれば全治

家傳 秘方

輔神丸

一包七匁ぶん 七服代銀拾匁

大阪北久宝寺町三休橋西へ入
船越敬祐製

此薬ハ犀角大人参洎夫藍等を以て製する故に味さハし
ふくして其妙功神のごとし第一下血とて大便にさきだち鮮
血とやハるり 但しそよりてきくろくかゞめりたる是あへて腹中より
ちをくだすものハけくすり効あるし
血のくだるにあしバ肛門の内やぶれて下血するなり
甚しき者ハ一度に五合五升とある事あり数日くだる
ときハ精氣よはり色悪くなるべし此病に此薬を用ひて速
功をあらハす事奇妙なり其外吐血衂血咳血等に大妙
薬なり婦人月やくのとゞこほりの止ざるに妙功あり一日に五
ふくづゝ日に三度にのむべし百發百中の神薬なり

繪本徵猪軍談　巻之三四

黴瘡軍談巻の第三

襲敵陣遺毒喪首
失本営瘰癧晦迹

伯列米子船越敬祐著

悪毒自在に誇つゞる人体国に攻入る黴賊ハ瘰癧瘡遺毒抜兼の悪人あり二賊ともに智謀深く攻戦に慣たる年を経て玉茎城を蚕食し遺毒抜兼ハ八方に着腐とかち要領に筋骨疼痛の陣を張り胸肋にも疼痛腐爛の砦をかまへ又支体及び膝頭のごとき陣をかまへ両脚向脛にも骨疼痛の陣をなし或ハ其或ハいつこ或ハ腐爛し或ハ膿水を流し或ハ骨を蝕て往来させ目おとかるべし攻侵ハ瘰癧結まるハ首より咽喉一面に乱疼

所天呉子ぜんと高らかに喚ば竜族ハ大に怒り出るまくの悪
言を逞しうしかにしさらば先汝を生捕て生ながら其舌の根を抜
んと遂毒竜剣ハ西雲の方天戟をおつとり霹靂稼すゞ連環
狗褌の流星鎚を投うけ揺軍を驅て毒地よおそかゝる首領
加茶附陽ハすこしも騒がバ嶋家を率て陣御をかため輪を発て
麾けバ宋軍の陣中より鉄炮雙とならべ放つる事雨のごとく然ん
よ立る賊軍二百余騎枕を並べて打倒され勢ひかゝりける
所へ宋軍の総先鋒先をそろへ面も振ず切てかゝれバ賊軍ハ色めきた
ち已に総敗軍となりかけるとき竜族将ハ高き上よりのゝしるゞ
髪をさばき手に宝剣を結び口に咒文を唱ふれバ忽ち天地晦冥
濛くなる毒霧陣上よ覆そゝり咫尺の間も分ざるまであやなかりし

も勇みし棗軍どもが茫然として向ふ所なかりしが賊徒は将より
とろくへし度を失ふ棗軍を見るよりおのがちに一人もなりま
さじと攪みたる葛根加朮附湯心ハやたけにはやれども妖術
に眼をくらまされ将卒ともに引れ討るゝ者数を知らざれ
怒犯に如く残より中陣に扣へる治痰丸遥に此体を見て
大に驚き後陣の獨勁散と一手になり疾風のごとくかけきたる
中にも獨勁散は陣頭に向ふて仙胴消毒の術を行へば毒霧
たちまち消滅して敵味方の陣営分明にあらはれたりこれに
氣を得て内よりハ葛根加朮附湯外よりハ治痰丸獨勁散の三将
と励まして敵くに切てはなれ思ふ切先するどくして当るべから
ず賊軍ふたゝび敗走なし右往左往に崩れたてば両賊将

もとも崩れ立たり後に数千騎に討なされ本陣を落さして逃
去る高根加本消湯治倉丸徹勤数勢に乗て追掛く
付入せんとぞありけれども賊軍已に営中へ入りかゝて守る
て出合ざれば其日もはや暮しかば軍を収め野陣をとり合戦
の次第を王城に注進ありしかば渡直は軍の様子を聞國中にむかて
申しけるは味方に合の一戦に打勝れば此機とこざれ攻
立るは賊徒の滅亡もとゝあるべからん明日の合戦には某も彼輩
に向ふべしと述られ勝とつげ綸巾を戴き羽扇を携へ安
車に乗じて直に某軍の陣に入ば大将とゞめ士卒にいふる
まぞとゝく勇気をまし元帥此にありといへば賊軍の妖
術を恐れたるしば凱歌を唱んるも陣を出まじと手を拘く

悦び合ふ淳直ハこれを制し賊徒一国のやぶれとなるといへども猶
自然強大なり殊に彼が賊将ハ智謀深くして出没測りがたし
将卒心を一ツにして切にかまへて動かざる時ハ甚しく急にハ攻め
がたかるべし先賊にせまらせて其動静をみるべしとて其頭目を望
より三将に下知して交る〴〵賊営に向ひ戦を挑むといへ
ども賊軍ハ兼日の手くばりよろしく塁をかたくし溝をふかくし
防禦の術によく〳〵すぐれければいかに攻れどもよはらざりき
爰に巳に数月をかさねけれバ淳直ハこの体をみてかく長
陣に日を経るならば国中の騒を引出し却て味方の害となるら
ん今我に二策を設けて此備へを打破るべしと急に主従
仕を池へ延寿丸を呼よせて諸陣に触て囲をとかせ

しかば陣中にハ燎を篝とたきたて籏指物も其侭立おきた
兵卒も鎧をとかず眠りもやらず偵にふせ敵のよするを待居たる去
ば織陣にハ八千余騎を三手に分け一手ハ慓歴将ゐるを大将
として陣中を守らせ一手ハ遊毒抜兼自大将として柴軍を夜
討にせんとするハ甞て待り人ハ枚を含ミ三更の比営を出て直に
柴軍の陣所にいたり忽周囲をとり卷て伐り入一度に三方より切て入しかバ
柴軍ハ大に驚き敵を防んとするものなく鎧を棄て兵粮を
棄て我先にと逃出しハ織軍ハ只一揉に柴陣を乗取り勢ひに
乗じて追うけ落行たる武具兵粮を奪ひ去る夜の明るに
明んとする頃ほひ行く天実狭邑の辺にいたりし時忽然一発の鉄砲耳
元に響き柴軍の体を一度にあわて騒乱しし徽軍の横合より

延壽丸(えんじゆまる)伏兵(ふくへい)をもつて遺毒(いどく)と討(うち)とる図

徽猷閣待制陳希真

烈風のごとく打てかゝれバ今迄逆ふる柔気も無く只守りし五十く
左右より攻よする勢ひに如何でか敵すべくもあらざれバ徽軍忽ち切崩され浮
足に成て逃んとするを遺毒抜兼大きに怒り敵計を授けるとも何かは得の
ことあらん彼へと進めて戦へやと自ら丈八の矛を揮ひ士卒を励
まして進み来るに一人の大将黒革の甲に身を堅め無二無三に乱軍を左右
に分ち手に緑沈百錬槍を携へ雷のごとき声をあげて悪賊何
の賊ぞ我こそハ徽織追討の将軍の陸延寿丸が手並を見よと
ざるゝと罵りもあへず生一文字に突かゝる遺毒抜兼ハ怒る兄
あら手とめつくえと渡り合ひしく防ぎしが延寿丸が勇壮
悪みがたく股脛数ヶ所に手負ひ已に危くみへけれバ小織といふ
七歳なる子のこたちまち妻の命を捨て戦ふ内抜兼へうちかゝる

一發に三具ハ延壽丸ハ無勢を殺し六七騎の小賊を殘也
に上げあらくもの飛し纏の弓より一筋の流星丸と見出し
中く捩兼ゞれと見んぐ投付るに殺ぐれ手を啻して鉄の甲
二ツに破も殘る留れれ脛に徹しさしもの捩兼目くるめ
きたるより先ず逆さまに落る所を延壽丸跳付て只一捻に
さし殺れ大將討も殘徒全かりれ数多の徽軍幾のこを殺
すゞらく絡くと落ちと延壽丸首招加本渦湯が攀浮盡ぶ
旗本の勢と一ッになり短兵急に追つめ敵を折る草木薙ぐごと
く又たゞ猛虎の羣羊を逐るに異ならざれハ余騎の徽軍
にづろ又六百騎となり本陣さして逃帰もどれバ跡にのこりし廉慾彼
る櫓に登りて遙に此体をミて大に驚きれさらくハ遺毒捩かる

兵を突出して援兵のすきまなく遂に門内に飛入る跡
に續く呂溫呂術武湯等諸軍一同によく〳〵と聲を入今
けれバ蔡歴今ハ百計つきて髪をさばき鎧袍をかなぐりすて
士卒に紛れて落て行く大將かくのごとくなれバ賊兵どもハ
いよ〳〵及ばず或ハ落失或ハ自害し須臾の間に賊營全く
陥りけり延壽丸ハ勢ひに乘じて陣柵を毀ちて火をかけ
て焼たてひ兵粮を奪ふて將く英氣を奮ひ諸軍を
將ひて迯るを追ひ長く驅て大に勝を諸所の壘へ推よせけるに
賊軍ども遺毒ハおそれ蔡歴ハ落失せ本營既に落しけるを
と聞く防ぐべき氣勢なくいづれも壘をすてて陣を拔て援兵出て
遠く郭外に逃れさり偶落のこりたるハ兼軍に害せられ

國中今まで一統に服したりけれバ淳直ハ素より將帥多く法度を
まつ世を其のちハ主城に帰りて軍の次第を奏し且法道の往還
乱後治世の大旨を示し給ふ論定すれバ國主ハ改めて大に喜び君
國久しく賊寇に犯されしを先生の智勇によりて妖氛を
はらひ淳ハ再び天日を見ることを得たり其より此后治世の
要論を示し給ふ恩恵実に身に餘る先凱陣の儀式猶
いさゝかと山海の佳味を具へて是を饗應し酒宴既に及
ばしく國主淳直に向ひ此ころ君属國より使者来り當國平
定を祝す依て先生を彼地へ招待なすべきよし申越しけり
今先生の力によりて吾國已に平定なれバ願くハ先生労を
厭ひ給はず彼地へ赴き給はゞ其國にも満足ならん

延寿丸は勇猛ありといへども其性仁慈にして良民を害す
ることなし殊に此度大功を立てたまへば彼をもつて征賊大
将軍となし給ふべしと奏すれば天皇は深く考へ給ひ
久しく軍するに困しみ今始めて太平に到りてある将卒を
百姓くは天民をやぶるを怖るべし延寿丸が勇猛余りて
其必用たる者なれば彼は其儘召つれ玉へ先生のをしへも
背きがたけれど延寿丸が部下の兵をかくの如く召連玉ひ乃
用人に備へんといへば渡邊もいかんともする事の術なかりしかば
とて延寿丸が部下の精兵を呼寄し委細を語らひ忍ばせ
ねさせ玉ひ王に請て酒宴を収め是より其に属せ玉はんと
其用意をなし諸将を引つれ国王法院にわかれを告げ

路を分て立出るがごとく是を送りて遠く王城の外に

いくり数里にして手をおち法人は王城に帰り淫虫が一

隊は直に属国へといそぎさりぬ

血熱敗走黄泥阪

下疳滅亡陰頭山

穀道国属国の内穀道長楽といふ国は主国の妹にあら

ざる所にして餘の属国に同じからば是を名づけて主管とよ

此国の主人公も彼妖婦に狎き国中に黴毒攻入しく乱妨に

臥しければ此国に向ひたる賊将は下疳早成骨痛動須の両人

なり下疳早成は此ありより国のへに陰茎山の尾崎に陣をすへ日夜

にわたく出で陰茎道を攻め侵れば此国は女国交通の衝なる国

用意といさんといへバ國主ハ大に喜び令旨を傳へて武勇比
諸将をよび集む頭長ハ諸軍を点検し将をよび隊をわかち
次第とさだめて向ひける先延胡索ハ二手勢を率ひて先鋒とす
後陣ハ大黄牡丹皮湯を大将として大承気湯の軍を出
遊ハ石と戦場とさだめ整々として推ゆく〳〵と聞より
骨痛勃須ハ下痢早々と諜じ合せ此度の大将ハ智勇備り
かゞし元孫の軍ハ危かるべし骨痛勃須数手勢を引て安陣を
出べく途遅く遊り下痢早々ハ千のごとく浣腸山をもちり麾下の
賊将無熱微痛に命じて要しく浣臺道と攻め討しむ是淫
臺道ハ其中すどの要処なれバこそと攻る時ハ苦悩其中に急し
其主叛閉に堪えばかぬとやからく意角などなめ〳〵和傷を

ぞく かんそう ト云
げんそやう
延壽丸
下痾骨痛
両賊将をころし図

緑沈鎗で指くちくこよう血熱ハ丈八の蛇矛とふるひ総率
を駆て進み戦ひけるが延寿丸が勇猛に敵しかねて陣勢
みだれけるを見て至る所へ胃痛が軍勢兼軍のうしろより襲ひ
来り勢ひ烈しく揉立ればさしもの延寿丸茶後の敵とあし
らひ兼ねて陣御かぞれ且戦ひ且退く胃痛血熱ハ猪
に乗り是を追ふて小腹の辺にいたりし時延寿丸忽ち陣を
長蛇に備へ合図と覚しく一発の烟硝を発ると斉しく上脘の
方より大黄牡丹皮湯が一手の軍勢恰も雷霆の落かゝるが
ごとく敵軍の後をのぞんで打て出けり胃痛血熱ハ大に驚き
敵謀を設けたるぞ平場の戦ひハあしかるべし早く陰営を引
くべしと呼はる内に大黄牡丹皮湯ひしくと攻めよせ薬汁と攻

く製しる鉄炮を雨のごとくに打立けれバ業氣雲隣にして
霧のごとく徽軍服をひらくことはならざりけれバおよそ延寿丸勇猛
なりとも十陣しみだれ立る徽兵とる帰に徹を入陰下につた
伏せ候若無人にはまはまる血煙青痛も自らはとくごしく
案兵を防ぎ兼る所延寿丸ハ遥にみえて大きに喜び望む所の敵
ござんなれと一数に駈より大将と同しきりと突く勝むべし
青痛動須胸門に血烟り立一声長く叫んでうまより倒さる因に
名をけり血煙ハ魂ハ天外に飛びさる所則さとく遂に遁せバ残卒
上崩きになり残党の所悉して後を見跡を慕ふて数子の業
軍ハまさじと追ふかどに病繊ハ招同もふしバ足にまかせて逃し
がたよ走るを數十里ありて血煙始めてくんひつたされに業氣にむし

残兵一人も残さず黄泉にさまよへりこゝに寂々として関外におそれ
抛ち死生も忘れたりける大黄牡丹皮湯は血塊が首を探り
下陰の先に貫ける猪間とあげゝ忘れずと引返し山府延寿
丸は逃げて血塊と大黄牡丹皮湯にまかせ我が手柄と討程に
後山へ進せ向ひ進て声々を攻上る己塞の大将下痢早くは
投ごに我のひ背痛は再び血塊は逃げうせ在亡を忘れど孰
今は此山塞保ちがたしと手を逃れんと蔵支度とうれ所に猪
おこりたる客軍起りて塞門を打破り縦横無尽に乱入を
いへる所見えて逃るゝ所を黄将と究め鐙踏て肩に撓うけ
後ある所に降り大刀とふり残兵と将ひき切て出でこの入る素
兵と薄ぎて一条の血路とひらいて逃れんとする所延寿丸も出

と跳りして幕を遶り残賊を争ひ首級を挙させと捻とひ征りたく
突かゝる者どもも力を尽してこれをさへぎりしが已に心臆したる
上ハいかでか延寿丸が勇威に当りがたく忽ち一陣に突崩されこの
うちに残党ハことごとく味方に属り従く山寨全く平
定しけれバ火をかけて寨営を焼はらひ兵を収めて凱りたれバ
て大勇壮母は湯に出迎ひ互に錦軍と称しそれより両将と
合せ法道法府骨節の間経絡まで残りなく纏りて残賊
と追捕して後主機に帰りて淳忠に謁しけれバ淳忠ハ是を引
く迎入れ謁し軍の次第深く奥の始末を委しく奏れバ主上ハ
ふかく悦び両家再度の大勲深恩忘れもつまるべからずとて甚
労を慰らるべしと大に宴をひらく淳忠及び法将と賞し

拒ニ鋭鋒病賊殞レ命

其次の属虫と稱は萬吉といふ此虫へは上攻結毒痔疾痔漏の五臓将数多の虫を引て攻め入り口中門穀道門に陣を張り虫狼運送職指送下の者共々ぎりに結毒が郡下の小将湿及痛及頂癬及際の辺まで乱妨し其害は眼耳まで及の法門に籠し一国是がために弊へ終へ国王の百官若下民のなげき餘の病虫に同じからん今度倶生神の勅により営実浮塵並びに其余の大将とよび迎へ徴賊対治の事を付属し浮邁は虫に入てより直に法度を巡見し一国中の形勢を察し其より虫王にむかひてやしけるは賊徒の要路を立きり虫勢既に衰ふといへども脈道の流細なれば病症に適する所は皆後記

いまだ虚弱すれバ大役かゝく腸液下らざれバ大害あり不測
小奇計とのりくし此悪徒と平ぐべし心を安んじてうまへもよ
るすゝうと先軍立とうれ尽しと諸将を召つどへ先陣後陣
と定むる時に徽勦殺座中より跳り出て某元帥に願あく候
国にいたり未奇功をたてざれバ蛮国の合戦においてハ某を以
て先陣となしたまふべしといふに詞いまだ終らざるに延寿丸すゝみ出
く声を上げ徽勦殺何とて云はるゝや某已に両度の軍に打
勝大功一方に及バで蛮国にむかふ人の後へに附べきや某
こそ今度の先陣なりといふに徽勦殺大にいかり汝忘るゝよ
自負して天下無双の勇ありとおもへり戯言なり汝ハ
労らんや蛮国の軍ハ是迄来先陣と申しうけんと争ふと

淳直是を制して温中元気の乏ひとうる凡よ体よま病有
種くの症あり未きも又虚不足ありたらば微効散が得を得
ざる病よ延寿丸を用ひて得はより延寿丸の功をまうけし延へ微効
散むかふて寿勲とたつ得君元舎一例なりがらし商あるよある所
の上部の結毒あるどよハ世医ハ只臭蒸あらずてハ付ハざる毒ありよ共り
是甚ど得りるり微緘の攻めへる所上下左右内外の病例ある
尽うしくを変態百象なりとも只これ一種の微緘なり甚
症よ過ずる附へいうる未も功とうつ是延延寿丸所くの牢ふ
功ありしへ能を症よ適ざるが由へるりさりとて必ず微効散よ
猪ひよへ悲く其症よ適ぜざる附ハ微効散よ漏るものもある
尽し先此度ハ延寿丸と用ゆるといへども先陰よハ十全大補湯

と用ゆるなり其中へハ当時既に衰微してそれより頽しき
合戦ハなりがたし十全大補湯ハ温和の将なれバ彼と用ひ
て法道と安撫せしめ気血と循環させ鋭気と蓄へて黴賊と
防がせ其間に延寿丹ハおしすゝんで敵の後より入る戦ある
ば其力全く疲したる時一時に打ておこく手詰の一戦と催
すべし此次族至所あまさるれバ黴動散と用ゆる時もあら
んか先此度ハ我が下知に随へよといへバ黴動散ハ唯々として退き
延寿丹ハ大補湯と伴ひ陣所に出て用意とさし惣勢み守
扨て黴陣へぞ向ひける上攻結毒ハ痔疾痔漏と瘡の巣
く合図ありし夜軍何方にても攻め来たらバ一方より切て
出べく捷ちに討まとべしと構へける此度夜軍むかふと聞結毒

は癆頭痛に下知して頭の辺を乱妨させ痔疾に牒じ合せ
く下部の辺を責やぶらし先軍手にてその戦ひをなさば血瘀
結及縦動して作る色切る虫中萎衰弊せんとす其づ
さば其部に攻のり一挙に血瘀を亡ぼさんと謀りたりかゝる大
補湯は先陣として虫中を押し廻り氣血水の良民を安
びやかし財宝を掠め往来の妨をなす邪の小賊を追ちらし
良民を助け氣血水を往来させ又五臓六腑の弊を救ひ
悪く妄に戦はゞ後陣の時を待合ば微賊は巣に遠
かくて味方は所々によるべしと廻し陳皮を追放せよと上下
より進ませしめて攻れども大補湯はかしもさへぎりて来
敵を追退く陳皮を堅固に守りければ微賊はいかんとも

さる程に陸奥ハ兎角するうち後陣の延寿丸が勢到着
別しけれバ茉軍ハますくいさゝ乏ち勢ひもなく所々に陰謀
ハ上攻結毒痔疾痔漏ハ此侍どもにて氛代いつしか此まゝそれハ
味方の毎陣絶て敵勢ますく振ひだしいかにもして茉軍を
追ひおとさんと上下一時に合図を定め勢を寄して推寄る
延寿丸も手勢斗りにて打て出で両陣互に囲を作りてちくと
ところよる時に徽軍上下の陣門を一度にひらき両織将おし寄
出る延寿丸を指して腐茉の猛将身のかぎり顔ハ来て虎
の鬚を撚んとかゝりしが延寿丸ハ冷笑ひ海ざるこそあざ
ましき淫邪の類起死回生の霊薬にひろく吾用の荒云
と吐くなるうれと先我が手並のかぎと試よとて例の大鈴を

まりくど引ちがへ法軍どもゝ電のごとく突かゝれば
獺賊も切て出いで手先を前にして働くうち延寿丸ハ後ろ
間より流星丸をとり出し上下の獺軍を望んで擲と
投付るに賊将をはじめ士卒まで此流丸に中る者ハ或ハ血汐
を吐き或ハ悶絶して矢庭に五六十疋たりける上になりければ
顛倒して地に伏ば軍勢乱れて立へ乗じバ延寿丸ハ法卒に下
知して短兵をとりて切伏く一息に両陣をまくり立て敵の
え逃し合せざるうちに悔くと引上げ陣つと頻して押へる獺
軍ハ漸くと備へをかため味方を点検するに討死手負千に
て何の益もなくいつきれ逃つてありたるが生捕首
陣どうり上下牒じ合せて某軍に拵ませ今日ハ先づ撤く手結の

えんじゆ丸
ぢしつぢろ
延壽丸痔疾と討結毒を追ふ圖

うち
うける
このぞく
かしらく
のがりて
ろうくの
ざいと
うん
上ろうけつぞく

一戦とおもひしに勢ひのつて攻かかる延寿丸ハ敵を矢ごろに引寄せ
時分ハよしと植たる鉄炮雨のごとくに打出しけれバ
ひるんだる所へ伏兵又百余騎を引連れ陣の中を八字にひらいて
切てかかり猛虎の羊群へ入るがごとく西より東にかけまはり
右より左へ靡け敵兵の乱足立つ所を大勢にて陣中に攻入り
内より門を鎖して再び鉄炮を繁く打出し要害堅固に守り
けれども徽軍ハ運を切ぐり怒るといへどもいかんともすべきやうなく
これより日々押寄る度毎に延寿丸指揮にて働く程に或ハ切ておとされ
或ハ死しとて打伏せ徽軍死傷多きのみにて精兵ハ少し
もよりしが此時に大補場ハ手勢をまとめ諸道諸府を
巡撿させ徽軍小卒の乱妨をとゞめ宰血をも等き

補助の術を施せバ王平の勢ひ再ひ復し当家の命令行ハる小賊ども所々に散在する者ハ悉く官陣に帰りまりゐる者の後ハ賊首を告けれバ上攻結毒大に熱ひといへども痔疾痔漏が陣よりハ来軍劇戦をさすれバ小ぜり合に日を送り其内に王の勢力を復せんとすれバ残賊も蔓に攻へかゝり已に七分通りを陣へ寄るに今の様子にてハ陣貝を王城に追返され後にハ籠城の手組猶豫もならんとて手早く謀を定めざれバ臓腑の憂あるべし其が為には先以前の如く頭痛に命じて頭脳を攻させ同時に口中の敵を門と立切りを其力を弱らしめ薬軍の向ひたる所ハ烈しく当りて兵威をふるひ益王民を包しませ薬軍の退く時ハ静に進で臓腑都城に攻へかゝり王城を討んと足下ハいふがひなき玉ぞ

ひゞき霹靂のごとく声立つる随気一連に百骸ぞろぞろ徹
塵にくだけて死したりけり此勢ひに霹靂しきりだなりける
随軍と延寿丹が精兵切先をそろへて切まくりきり払
ひ責かく死人のやまを築き上攻結毒痔瘻
漏はもとして守りをかんと諸勢と下知して備へをそて
自ら兵器をとつて敵にむかひ身命を惜まずたゝかひければ
随軍再び勢をもつてかゝらんとするところへ延寿丹は摩利支天の道
なる勢ひをもつて莫大の血を灑ぎたる陰所を守る首にひとき
そこかしこに痔瘻痔漏とよんで只一突とかゝれば痔漏をむざんにぞ
一番の脇を雷霆斧を打振り勢ひむかひて二十余合戦
ひけるが気力しきりにつかれて危くみへければ上攻結毒疳瘡

の残徒ハ立足もうて衝し結毒と引起して肩ニ引掛本陣さして
無下に延胡丸ハ従軍と割し窮寇ハ逼るべからず今自己
ニ痔疾病痛を射ぬり結毒ニ生を便せたるが残賊どもハ宗
かどのるうつら人若徒くうが迎せせハ欲徒必死ニるり遂し
合せんが甚附ハ味方にも亦死傷多くしれ新に又復しなる
国勢劇戦ニよりて再び潰へるるのもあるべし只追ことそれしとく
軍を引あげよと下知されバ従軍勢殺く遠くおくバ引揚
ともうして傷閉と三度あげ本陣ニ引よりけるかゝる所へ元帥
渡亜東を延くいで来り延胡丸が武勇大補湯が補涅統率
の忠戦を賞じ大補湯ニ命じてのうく虫本の閉耗を採ゞ宜
けらべきの血気の国民ハ同くニ勢ひづに賊徒ハ次第ニ蔟うせ

悁悒の本陣にありしくの所にゐたりしが是をさとりて延寿丸を
遁去と引て再び徽陣に打向ひて諸毒は先月の合戦に
重手を負ひ物の用に立ざれば其上去年同じ役にて病を在
士民の勢ひ纔にたらず血肉腐肉かゝりたる者も血正
肉にかゝり浪人となりたる者も僅に下知に従はざれば其上新手の兵
を攻めよせよとて今はや是まで也とて残りし小織
を集めて最後の酒宴を催し其後本陣に火を掛自首を
刎て一族ものこらず焼亡にけり延寿丸は火の手をみるより急ぎ
祖先の大姫を引具し城を落りし織将の首をとり從ひ近江へ落
来たる残将を祖へ先に書て落し打入り悁悒へ全く平定して
居諸軍をひき本陣に退きまれば渡邊番役の功を賞し今は凱

陣をすべしと思惟をとゞめて隊伍を整へ主城へ還向なし玉ふ
主へかくときくより遠く郭外に迎へ手を連て都城に入り
淳安栗は諸大将に数多の金宝を与へ大に宴を設て凱陣
の儀式をとられ夫より次の属国より倶生弁まゐり彼国の
賊徒つよけれバ又勇名高き延寿丸を差向け玉ふ元帥は
当国平定の後帰りありしと再三に乞ひければ淳安も止
ることを得ず其乞を許して是よりそれぞれ延寿丸に遣去の采務
を与へて先達を彼国に向はしめ己れは諸将とともに道路
国王代さしして乱後治世の術を論じ喜ばしく日
数をかさねけり

徽癈軍談三の巻終

黴瘡軍談巻の第四

伯州米子船越敬祐著

延寿丸矜レ勇取レ敗
黴効散定レ計討レ敵

其次助八といふ人ハ新国ハ上攻結毒が子結毒雑治下疳早成が子腐燭下疳の両賊将入こミ陰茎山鼻梁山を攻侵し陣を進めて国中ハ向ふ山労決ハ陥落し下民逃亡して氣血河も肌肉枯痩ひ又両眼門ハも腐爛疼痛の陣を張り小織ハ下知して逆急を乱暴させ頭悩の間ハ往来し関を作り鏢を咽喉ハ撞たるハせバ其様頭つ耳門ハ震ひ太脉揺動して裂るがごとく居民の嘆き国王乃苦

悩止と死ぬハ是延六物解毒湯龍膽瀉肝湯山梔來剤乃五
寶丹紫金丹雞汁黄武ハ経絡剤香芳散及皇甚丸等打
てとして向ひたれども賊徒強くして鶴す何さりバ国家危
殆に及びしに倶生神に勅ありき国王始めて心付き営実
淳直と元帥と敬とらるに此頃いまだ万吉国に在て浪国乃
討とられ宮中なれバ先え殿下の勇将延寿丸と招請し是
を以て徼賊追討の大将軍と定し不日に合戦を催ふさんとし
両賊ねハ先ん逆て万吉国の左右を守さ其駅くの延寿丸
に討れさるを知きバ此度当国へ彼が推寄ると聞て一ハ喜
び一ハ憂ふ喜ぶゆゑんハ当の敵に出逢ゆへなり憂るゆゑん
ハ延寿丸が勇猛無双れバやすく鶴事と能ハざる故なり此に於て

妾将ハ許沁此度の合戦復仇の志しを遂んと黴毒大王の
力を借より外ハ計あるべからずと商議を定め妾将称しく雲
を起し風に乗じて悉に黴毒王の都にまゐり再拝して涙を
ながくと流し大王に宣て吾つんなくが父下疳早成る長
禄国に於て延寿丸が為にはかなく討れ上攻結毒も寸白国
にて奴にうたれ其無念骨髄に徹して忘れがたし此度ふたゝび
が攻入し豊八国へも延寿丸おもむきて呈當の救ひに
大王の為にハ重なる怨敵なれバなにとぞしても彼を討えん
となずれども彼が武勇ハ古今絶倫にして吾曹の及ぶ所
にあらず何とぞ大王一臂の力を援け彼業丸を打なちて
が忠孝を全うしゝめ玉へと謹んで述にける黴毒王も具に

きし畢ぬ汝等が云ふ所尤道理に叶へり急ぎ加勢を連れ
廼しに諸国の注進によりて延寿丸が勇猛をきゝて世に
中々力を以て戮んとせば必定勝負はあるべからず仍て今汝等
に一術を授ん此術は古へ相馬の将門が用ひたる所にして一躰
七分身の法と名く汝等此術を行ふ時は一人の身七人と
なり言見力用ゆしもかゝらば延寿丸たとひ無双の勇あ
りとも汝等七人十四人と成て向はゞ彼討れん事必定なりと
呪文口決を授くれば安将は大に喜びかゝる奇術を得たる上は延
寿丸を討んこと掌にあり追付左右を奏すべしと加
勢の理熟五千余騎引連勇を進んで出立る去程に
延寿丸は漸急に先達て豊八国につきて国王に謁して後部

下の精兵一千余騎を一手として國の中通りに陣をとらく悪賊ねら上下陣の通路を立切て大ひに軍威を耀し結毒雑治蝋燭下痢の悪賊ハ待設けゐたりけれバ上下一時は棟じ合せ逼去とすぐやて二千余騎づゝ隊伍をとゝのへ柔軍の陣前に推しよせ一度に閧をどつと發す中にも悪賊將ハ陣頭に身を現し柔ね延寿丸ハいづくにある對面せんとほゆる内延寿丸も同じく陣頭に馬をすゝめ是こそ消毒延寿丸なり悪賊等とく目に見んと欲せバ座あて降參を望む者あらんと云へバ悪賊ねハ牙を備て大ひに怒り延寿丸匹夫已にあくが親を殺し君家を乱暴するや今日此所に推よせたるハ生ながら汝を擒にして其肉を喰んと欲し

呼つぎ四面より打てかゝる延寿丸ハ事ともせず鑓を捨て剣を抜
左の手にハ鉄鞭を揮ひ大雷神の荒るゝごとく十四人を相手に
火水になりて戦ひけるが正しく前におりふせうるとおもへバ忽然
として後に在り右ハ切て落したると見えバ左にありて闘若
より一時ばかりの戦ひにさすがの延寿丸も気力労れ一まづ
引とらんと〇て魔術を挫くべしと透を斜って馬を返し陣
門まうけの金バ軍卒も跡につゞひて乱入る賊軍ハ勝に乗り兵を
振りて追手を付へよせんとひしめくを延寿丸下知して鉄炮
弩を雨のごとくに打出せバ賊軍面を向べきやうもなく今ハ是
までなりと兵をまとめおし退いて陣をとれバ延寿丸も
四門をかたく閉させ兵を分て持口をまもり終夜眠らず

らうそくげん
けつぞくみんぢ

病賊分身の術をもつて延壽丸をやぶる圖

賊軍ハ夜の明るを待て寄せ来るを毒矢ひる者を撰出て散々
小屋に主居ねむり又ハ馬より下りて赤裸なる者居眠りなどして
欺きける延寿丸ハ岡へ駆るといへども力つかれて戦ひがたく死を志
すれバ只かたく守りて出合ず彼を遣て淳直を救ひを求む此
時淳直ハ万吉国全く平定したるを見て急ぎ出さんとお
もふ所へ延寿丸が早打来り軍の次第を注進しけれバ心
太に驚き急ぐ救ずんバあやまちあらんと万吉国王にいとまを
告げ諸勢を率して矢のごとくに馳来て王城に着て国
王に見へ軍の様子を告国中の安否を問バ国王ハ再拝して其
労を謝し先日延寿丸賊軍と戦ひ堅しが術に陥され陣に
逃入て再び出ず賊徒ハこれを侮て隙なく推寄て戦ひといへども

頭項を震動させ鼻梁山を摧き穿ち臍輪道の血肉城
壊ち乱婦娼に借すれバ其としの腎気に苦脳さるゝことを
探するがごとし先生まで妙汁を下して髄ひさへと流と共に
かげさるゝ重淳直ハ是を以て國王つくく嘆きさまして其自
向ふ上ハ急所より賊徒を誅すべし先より此に打さんと無労
と引連て延寿丸が陣に至り合戦の有さまを問ひ定て後
激動散を呼出し汝先に万吉國に至りて延寿丸と先陣
と争ひしかども其下知を守り彼國にてハ延寿丸に功を
譲まり當國に於てハ改めて汝を以て討とらんと先へ向ひて
軍功をあらハすべし但し延寿丸ハ再度ハ先王誅より引退て
休息せよ猶まだも旗指物ハ其従者にして汝が戦に捨よりかせ

出て荒言を吐ハ殊勝なり今討てやれ奴ばらなれども其胃乱
ふゆんして免しくれん早く退いて延壽丸を出せよ今月こ
それハ生捕て生るがゆ其肝を割きて亡父の幽冥とあふりんと
いふ寡軍ハ手を打て汝ふ忽ち頭砕き鬼と成すと知れバ言を
勃し胃を翻して行るかぞつあく首を洗ふて刀のあるを待べし
とどつと笑ふて陣中ふ入て内より門を鎖しふ鎭雑治下府ハ
躍り上りて大ふ怒り桀卒ども然ふを続ぐバ一時のれいむれを
ふすぞ去らバ此陣けやぶりてよと忽ち分身の術を行ひあ人の
形七人づゝふなり諸軍を下知して四面よりふ至かとミ元二
元三ふ攻ふる陣中ハ鳴を静めてひそくしが時分ハよしと鉄
炮弩とて及ふ切てふ落し雨霰と打ふけれバ寄手ハ進ミ兼て

とありけるハ諸軍兵力を落し勢ひくじけて乱をミつ賊
軍ハかくと見るより陣門をひらき切出んとそろへ面もふらず
切入をバ妖賊ねハ分身の術ハ破れ前后の敵まはしくらがき
く気も魂も身にそハず馬に鞭打つゝ逃行所に一人乃
大ね混甲に身を固め手に百錬切玉の宝刀を打振て悪
賊ハづくへゑころや業軍四天王の一員嶽勁殺此所まで来りて
汝に城待て久しと雷のごとく叫り聲を掌て立塞がる
妖賊ハ已に戦ひ疲れたる上烟氣に萎をて心神くゝ再
新手に向ふべき勢ひハなけれども遁れ難しと心を定め血刀
を揮りて左右より寄せ合せ二打三打戦ひけるがいかゞ嶽
勁殺に討るべき忽宝刀を請そんじ旦隙に成て失に分り残賊

どもハ散々になり陰茎をさして逆行て微動散ハ遏縮し首を切る手段を知ず日已に暮けれバ兵を收め陣を取て疲を休め夜の明るを待て陰茎山に推寄せかづき連て攻よるに微軍ハ已に大將を失ひ法令全うしバ軍陣洞のいバ只一息に追落され一人も残らず打死し當陣全く落着しけれバ賊營を焼はらひ居民を按撫して氣血を修理し國勢を處所へ梅肉丸準直が命を受けて三百余騎にて馳来る元帥の命なり吾ハ引返す某是より跡を縫てざへくすべしと微動散ハ軍を收めて歸陣し梅肉丸ハ残賊の諸所に隱れ居るを駆出し河水をせきかけて小腸より大腸に流しけるに賊徒ハ悉く洪水に溺れ死し

肛門道に向ふて流を落すこと滝のごとし是より大腹丸と
滝門丸と名付て賊徒大小畏れける今は国中全く平治し
けれバ淳速は諸将を召集めて其功を賞し別して嶽勅
散は功労第一なりと褒美し諸軍と共に凱旋す国王の
寵遇諸軍将への恩賞皆余国の例のごとしかくて淳速は乱
度国の仕置等悉しく示して後服従して諸将をさづく
次の国へぞ向ひける

両雄連出究二苦戦一
一将独進塁二印献一

其次に金吉国といふは此国へは便毒腫漫揚梅瘡広成の毒
賊将攻入て揚梅瘡は太陽小寒を搆へ四肢頭面背膊胸腹

小眷属と分て大小の瘡と起し疼痛して膿汁を出す便毒ハ
股の付根に山のごとく腫と起し其辺と攻侵せバ下部の諸処
㽲痛止むことなく国中淫熱行ハれ或ハ悪寒發熱し国
民難儀するも安堵することハ能ざれど是迄庸医の元帥に選れ
香蘇並に消風敗毒散と用ひて危急と防ぎしかど時と經て
寸効なく賊徒次第に深入して国勢漸く衰へんとす淳直ハ
諸将と共に此国に至り国王に謁して国の動静と問ひ且諸
と巡見しおハり四天王並に諸大将と集め軍議と示し合ハ
先延寿丸に精兵五千余騎と与へて先陣とし荊防敗毒
散に一万余騎と付て後陣と定め大軍に向ふて戦しむる要徼
衆ハかくとなりより額合せくさうちかへるハ自在専門に攻

入らる病(?)歴遺毒残てしぢめし其余の國〻に向ひなる諸大ね智と云ひ勇と云ひ何れも霊力が上にありしかども延寿丸瑞功散に出合ては誓しもたまらば悉く首級を失ふや霊力智勇を以て彼等に敵対せんは恰も卵を投じて石に当るがごとしいざや瑞毒王に目見へて助力をえんと忽ち二所の雲を起し是に乗りて瑞毒王の所に至り拝謁して具に旨趣を暢ければ瑞毒王打頷き汝等よくこそ心付たり是に種〻の妙術あれば汝に授ん去ども延寿丸瑞功散には智勇容易の者にあらねば己に即八國に謹て續寿雑治癘瀉下痢の毒を悉く分身の術にて延寿丸を悩せしに不意に瑞功散に破られて毒人共に命を損せり

然れバ六韜の術にてハ危うからん此度ハあらが大切の秘方を授る
間深く陣に心を用ひて是を行ふべし此術ハ延寿丸巌勅散が
砦の結破る所にあれバ一度是を施すときハ萬軍を療させ
んこと疑ひ無しと云へバ要約ハ拝辞して悦び勇ミ即其法を
習ひ受終まで記得して後巌毒王に別れ人倚国に帰り来り
萬軍遅しと待りけるが却説延寿丸ハ荊防敗毒散を先
立て三千餘騎を引率し巌毒の陣門近く推寄せ鼓を
ならし鬨を作り軍威を振ふて攻かゝる巌軍も鬨を合せ陣門に
冒ひて打て出で賊将楊梅瘡廣成便毒腫瘍と云を並べて
陣頭に進ミ銘々に名乗を高らかに畜生の業ねば見参せんと
喚ハれバ延寿丸ハもとよりもあへぬ馬を躍らして苑出で逆賊の

ら主延寿丸と其間遥に隔て友軍十分の難儀に及びければ
漢中ハ小高き園の上より是を望みて大に驚き急に山徹動
散を呼出し続く分身の術を以て延寿丸を悩す汝早く行て
救ひ出せよと下知すれバ山徹動散ハ一議にも及バず口に呪文の
兵を以下飛がごとく小賊場に駆付け敗毒散と一手に成り風
上より烟を起し勢ひに乗りて切ての王浅き城を攻散〻に斬付
せバ賊軍忽ち乱れ立ち其上広成が分身の術破れしかバ
延寿丸が勇気益〻加はり難なく囲城出で徹動散敗毒散
と共に厳軍を切ぬけ伏毒猿ハかくと見るより南方に
廻り習ひ受たる魔術の術を行へバ忽ちに一陣の熱風おこり
其あつさ手足を焼より甚しく是に当る者身を焼くが

おく軍ハ苦しく面を顰め戦ふ能はざれバ延壽丸微効散敗毒散ハとても叶ふべからずと知り兵を引つゝなを陣さして逃て行く賊軍ハ猶も毒の跡を慕ふて追討せバ討るゝ者数を知らず凉蓮ハ此体を見て急ぎ清凉の法を行ひ口に呪文を唱ふれバ忽ち小方より涼風吹来り熱気一時に消散し賊軍の術の破れたるを知て逃ざれバ諸薬ハ漸くに陣に入り凉蓮に見て敗軍の罪を謝す凉蓮ハ去一様責ず勝敗ハ兵家の常事汝等いさゝか心を労すること莫れ先退いて休息せよと皆々と退やり涼蔭丸を呼で此度の合戦に諸薬ら皆敗をとりて此賊をうちん者汝の外にあるべからず速に行て功を立よと謀略多く

けつぞくうんだ

だいかうさん
徽劾散の勇
みうしく下疳
結毒難治と
きく圖

云ひ合さバ治瘡丸ハて須賞し兵と率て出去てくり世喜
合戦ニ織徒广瞽風の術行ひ熱風國中ニ吹滿て國民
熱氣ニ侵され苦しミしかバ淳直が消广風の法ニて熱毒
を止め其苦悩ハやむといへども眼门の邊ハ彼熱風ニおもて
より氣血鬱乱して腫痛を發し眼门こゝニ塞がらんとれ
淳直ハ是を織ニて氣ニ洗眼湯ニ命じ是を救ハしむるニ洗
眼湯ハ眼门ニ號向ひ薬水を以て氣血の鬱乱を洗ひ腫痛を
散じ瞽附の間ニ功を奏し眼门の惱ミを全く平治しけれバ扨も
嚴軍ハ首ニ閉へ延壽丸嚴勅をもて一戦ニ打破てくれど
今ハ薬軍の方ニまニ立つ者ハあるべからずさとべ此方より逆
寄して薬軍を悩沢さんと評議する所ニ一人の小織瞽耳より

某拙見を仕る小菓軍の方より一手の軍勢嶶賊追討使治
瘡丸と書たる旗を立て柵外に来て陣を張て候ふ也
竊に忍び入て其様子を窺ふに巳門乃固めハ嚴けれども
陣中ハ甚だ油断の体にて将卒打寄て酒宴を催ふし中
央にハ大将治瘡丸と覚しく酩酊して机に倚て諸卒を顧
みて今度の合戦嶶軍甚だはよく名ある延寿丸嶶動
散も一戦に打負るのへ某再度討手の命を蒙り止ことを
得ず向ふといへども延寿丸嶶動散ふすら切情ぶどの強敵
我微力をもつていかでか彼に叶ふべけんや所詮明日の合戦にハ
必定討死と覚悟ある身なり仍て今宵ハ最期の酒宴をなし君
陣中も量を過して飽まで小鉢を今生の名残を尽すべしと

といへバ諸軍勢といへども勇気ぬけ酒を飲ども色青ざめ軍中
何となく蕭然なる体に相見へ候と告けれバ安椒ね八當を打
て悦び勇み此頃の孫くが勇名彼が恐怖するも理なり臆病
風のさそハぬ内を幸ひ推寄て蹴散さんと手招一時に鯨り
軍兵を催し立て一散に馳出し賊陣に到るや否や鬨を作
るや一度洪水の溢るがごとく捩連て切て入ア苦もなく陣
門を打破れバ賊軍ハ不意を打れて敵て戦んとする者なく
右往左往に散乱す浦蔭丸ハ怒て叫び比興の者どもの振舞
かな踏止りて討死せよと大刀を揮ふて切て出で廣成勝浪に
渡り合ひ火花を散して戦ひけるが酒気を帯ぶるゆへやゝお
太刀宣まじけれバ友人に切立られ叶ハじとや思ひけん初めの

言に似もやらぬ馬の頭と引ち見捨鞭打て逃失けり廣成腫
滿ハ一戦に治療丸が陣所を奪ひ意気揚々として中
陣に入て見るに肉酒取乱し杯盤狼藉として所々に琴鼓
笙笛抔並べたりさては此所にて酒宴を催せしなるべし今我〳〵
も是を用ひて今我の労をも慰めんと将卒一同所々にこぞり
元より無慚の者どもなれバ曾て辞譲の礼なく酒肉を争
ひ取りて飲むハ渇したる蛇のごとく喰ふとハ飢る猿のごとく
果ハ楽器を取上て或ハ歌ひ或ハ舞ひ一時の楽しミに百念
を忘れて有けるがいかゞしけん便毒腫漏尻居などうちおち
俄に口より黄なる涎を流し眼を見据て働きもならず苦しく
大に驚き立寄て介抱する内此者どもも又同様に倒れ臥く

して熱を生じて膿となり血氣鬱聚して腫痛を發し國民
大に苦しミける也國王ハ計を運し大麦湯に砂糖を加へ食せ
より向ハせ膀胱に停住する所の濁水に新水を加へ使せし
めて小便道の賊陣を水攻にして推流さんとすれども淋病內
下府陣中に府樋を築たてへる水攻をさしづて援ずれバ故に
討て賊陣の害ハなくしバ竜膽瀉肝湯五淋散其外種々
の藥種を向ハしむれども何の功もなく水路益々淋秘して疼痛
殊に甚しく國王諸民如何ともすることを得ず苦悩悶
と送りし所に此度倶生神淳直を迎へ来り一國の喜び渝
ろふあるく賊徒伏誅に指を屈して待居たり淳直ハ至て
てより賊徒の結構を委しく窺ひ知り先斉良湯に一方

四ノ十七

八千余騎を授けて内下疳淋病が陣に向ひ治瘡丸も軍
勢弐千余騎を合つく雁瘡疥癬を打しむ寄良湯ハ命を
受て直に食たより膀胱にいたり此所に陣をすゑて賊軍を囲
の下に見えんなかし諸軍に下知して新水をせきかさせ霧に
心ざしたる士卒を撰び出し対をそひ合わせ勢数千人と共に
何れも浮沓を穿き水を泳で澱軍の陣前に到り囲をとつ
と継とれば内下疳淋病同じく陣門を開ひて切て出で防は
上らんとする薬軍を追下げかさにかゝりて切立る其勢ひ烈しく
して薬軍遂に負色になり水面にどつと引く澱軍ハ勝に乗り
水腫乃底極て掘る堤の上に上りさらく水との敵を打立るが
忽ち水畜酒と唱り築上げくる堤めりくと崩れいくさせぞ

是をかさねて薬軍小割く命を捨て切結ぶ斉良湯へか
くゝとりより疾風のごとく小走りまわり偏刀を揮ふとりく
しが二人の賊ゐ忽ち首る兄屍とうり士卒の死體を苦ふ
水よ任つく流れ失ろりかくて斉良湯へ水の流れ落るを待て
堤岸を修理し水路とさへ居民を安撫しく後猶軍を催
がくまり摎へ引向さと此よ兄清藤丸へ軍勢を引率して道を
急ぎ斉旗ア藤が陣前まいる重囲を兆り敵を鳴して穿ひ
と示せバ厳陣より雁藤兼宝まを引くおて出ぐ何奴ぞれ
バ此所よ来つく騒動を起し我が軍を擾すや々早く退ぞんバ
目よ物みせんと居丈高よ成りて罵るまよ清藤丸へ馬を進て
向ふよゝ汝未知らずや近頃聖八国よ於て厳軍の濃ね揚

梅瘡廣成便毒腫満と共に一戦に討亡されたる薬師伊天王の随一
治瘡丸といふ家来あり今元帥の命によりて此処に発向することを
に馬より下り旗を伏て降参せよと呼はれば丁瘡は是を聞て
怒気満面に發しさては汝が治瘡丸なるか先に豊八国に於
て廣成腫満の両人を殺したるは只是偽の討を見ひたるのみ
何ぞ汝が武勇とせんや我今汝を一刀の下に誅伐して両将の
幽魂を慰んと刀を抜して切てかかる治瘡丸は鎗を以て是を
そらひ或は付入り或は受ながし互に秘術を尽し両軍もへとど
まて時うつるを戦ひけるが丁瘡が大軍遂に追立られ已に敗北と
乱れ綿々と崩れたちけるに丁瘡金菓は馬上にて呪文
と唱へ印を結べば忽ち波表に熱風起り薬軍は此風にあふられて

治瘡丸奇計
病賊を鏖する図

ふるまひしなぞで鏖にして呉んと焉を拾ひて印を結び邪術を
行はんとするを見るより延寿丸は彼の袖より流星丸を取出し
族ねの面を望んでえいと打かけあやまたず丁瘡が眉間に中り
さり頬上に血烟りたちて馬上よりまろびて逆様に仆れ
ば嶽徒はいよく途を失ひ散々に成て崩れたちを覚軍に
追詰し輩一人も残らず討とられ延寿丸は丁瘡が首をとり
落し寄手を収て凱陣すれば淳重ハ其功の速なるを賞じ其
日の功名の一にぞ帳に付させる其後淳重ハ荊落數嶽
撲業の大将と撰び出し右軍数千騎とともに内外に分
ちて脾膸が陣に向しむ大将は重ね打ちて撲業は脾膸に
向て脾膸が陣の後より大山の崩るゝがごとく罵を作く

攻寄すれバ荊防敗毒散ハ食道より賊陣の搦手へ出て陣所ハ井楼を組ミ其上に士卒を上せ火矢を發つこと雨よりも繁し賊軍ハ前ニ大敵を引うけて進むべき路なく後ハ井楼ニ立切られて退くべき方途ハいせんと周章ニ内とや陣中へ火をかけ黒煙と燃上るにぞ今ハ是までとなりけるを追手の門を推し開き出る所をもなくと撲薬が陣まうけ入て思ふまゝ戦ひ挑とうすべく討死す大ね楼も乱軍の中に切死し賊党ハことごとく焼失せ皮肉の諸営全く安寧に帰しけれバ彼大ねハ軍を收めしづくと引かへりかくて淳亟ハ諸軍勢と共に国王に謁し賊徒伏誅を奏しければ国王ハ再拝稽顙して是を城附し宴を設けて客慰す淳

勅も諸国の逆徒全く誅伏しければ心喜び諸将と共
に酒宴に連り献酬に楽しみをなし此ほどの労を慰め居
られける所へ忽ち一叢の雲舞ひ来り中より数多の人
おどり出で淳亜が前に再拝するをよく見れバ自在衛
門国の倶生神並に残し置たる延寿丸が麾下の士卒
なり淳亜ハ怪しみ詞を倶生神ハ国家の守りなるに遠く
此処へ来るハ何ゆゑぞや又業平ハ彼国に在りて賊寇を
禦ぐを防ぐべきに倶生神とともに此処に到るハ愈以て不審の
殊に各愀然として慷慨の気面に顕る察する所王国に於て
変あるならんとよく委細を告げられよと云へバ倶生神ハ進み
出で誠に賢慮のごとく王国再び大乱起り滅亡稍ち存

ふまづ其由来を申述んさても元帥属国へ向ひたまひし
后国中益々平定し上下无窮を誇りたる小安さに乗り
て危さを忘るゝ習ひあれば国王やゝ油断の心おこり業を
怠を遠ざけてくろしくハ用ひず精進を執行さなぢふ其
虚に乗りて邪気をまつる療癖脾胃嶽毒王と討て合せ窮
小王の逆に食慾貪色欲泥に溺れて驕を縱にして国王に悪す
とすれば毒食淫慾を勧しむ此者人元より悪気強深を行ひ
まべ一族に及ばず是小同ド屍王を勧めて肉酒を雪肉へ
引へ王女国と交通せんとく請ふ是によりて国王もまた稍
動きる是又一人の臣国王其名を夜服美兼と言ふ巧言
令色をもつて眼耳門より入て王の左右に在て媚諂ひ

食慾色慾と心と合せ諸の悪事をする大王淫虐出ときの
盲医は雅(?)を彼が言状守りて久しく酒肉を絶ち女國塗(?)
あるハいつわる事ぞかくてハ國土の氣衰して被せバ終に贅労
の病を發すると此悪事を用ひて國勢を侵し贅を被し
て樂しき流民と共に已に〳〵淫虐元帥となり出激(?)
織を亡すといへども是のと淫虐が功ニハあら〳〵國家の勢を
強きが田へに織徒遂にほびたるなり彼延壽丸ホの羽卒と
相ひまふハ長久萬全の討にあら〳〵若此後織徒増起のす
あらバ兵を以て元帥として已にいふする強織あるとも一戦に
討平げんと受合するが少しも違ひまふべからずと伝奉に任
せて従ひ遂ハせバ國王遂に其綱に従ひ食慾色慾の安住(?)

小令ゟて國中の法禁を廻目して酒肉を引入れ數〻女國と
交通す元より害ふることあれバ國王ハ是より政を收めず
日夜逸樂に耽りて王ハ食慾色慾時をわかず權威をふるひ
政令を擅にするほど小國中諸府諸道漸く乱れて下民逃散
して經絡滞りなど氣血順ざれバ國勢再び衰微れ此時に當て
癘歴ハ激毒王より兵をともひ起し又國中の悪民どもを語り
催し再び首筋に屯して旗を上げ次第に國家を蚕食し咽
喉天突缺盆の邊まで壘〻と結核の陣を張て泥丸を
堵ぎ諸陣相通じ其所紫黒色に盛ていくさを發し出を
開き稀膿黄水滴り一旦閉まバ一口を起し其あとに潰え
愈ることなく身体漸く羸瘦し飲食進まず盗汗を益

労瘵往来して咳嗽を生じ白沫を吐き大便自下利し又不
利すると兒ハ小便も共に不利して四肢に虚腫を生じ已に危篤
の症となりきたる是急に衣服美薬が元帥となりて六物解
毒湯と云て大坂にさかるを追討使として膏薬とさしそへ瘰癧を戡
七ふく業のろくへん
いしか或ハ雑汁ある胃風湯胃苓湯等の業将を用ひて日を送
るが故に治術寸効なくして病症ふゝある其ハ始め食慾
色慾が悪事を勧しと兒より諫諍に力を尽すといへども
悪徒ホにさゝへられ忠言用ひられざるのことなれバ遂に御殿おいて
遠ざけられ牢にこもりて主人公に謁することを得ずて久しく禁錮の
内にありしが已に国の滅亡近づくを坐ながらして見るに堪ず
竊に君辺に忍び入て誠言を尽して利害を説き衣服

美味を廃し再び淳亜先生を用ひ玉へと勧しかバ主人公甚
ふかく信じ悟しかバ汝竊に属国に馳行き淳亜先生を伴
ひ帰るべしと内勅あり某は是より直に出立んとせし所に先
に棄らるゝ素平国王の不遇を憤り元帥の許に帰るべし
とて某と共に出でたちさそこそ一所に来りしなり元
帥何卒吾国の不信を恕し玉ひて玉座を拝しまし国家再
度の危難を救ひ玉ひなバ独り国王某が幸のみにあらず
一国臣民の皆ことごとく恩恵に浴すべしと涙と共に演説
是をきゝて国王をはじめ一座の諸人愕然たることと良久く
何れも言を出す者なし淳亜は暫く沈吟し今足下の
言をきくに貴国再度の病乱其病已に必死なるに至れり是

こゝに国王某が言をもちひずほしいまゝに悪事に侈さたるより責らる所ありて自業自得いふもすべうなけれども国王今は先非を悔み孫の心より某が軍略を望み孫は足下のおとき無双の忠臣自ら来つくの請待かなしく辞みがたけれバ是よりふたゝび貴国に趣くべき旨某向ひくるも然れば治すべきや否やはかりがたし其旨を兼て心得玉へと云ば俱生神は拝伏して喜び不肖の某を憐みたまひ再度入国し玉はんことは大慶是に益てるはなしたとひ治術功なく滅亡に及ぶとも先生の指揮にあづかるは国中みな本望なり御許容の上は一刻もとくお立玉へと急がせば当国の君臣もともぐに言をそろへて是式たる淳直は頑

掌しまうば先に立出んと諸眷属を召しはやく用意を調へて國王諸臣に別を告げ俱生神を先に立て各々雲に打乗りて飛がごとくに馳せ去り玉へり

大將軍神四之巻終

黴瘡軍談巻の第五

伯州米子船越敬祐著

活レ枯回レ死巧手段
遂レ功全レ名大團圓

かくて淳熱が一族ハ倶生神と共ニ再自在湊門國ニ至ハ國中の
様子を伺ひけるニ実ニも倶生神の物語ありしニ違はず國の体勢大ニ衰
衰へ諸道諸府全兎角ず氣血荒肌肉脱ち骨立て背の面瘦て
淳熱ニハ此有様ニ心ひ傷ましめ慨嘆しつゝも漸王城ニ着れ直ニ
國王の御前ニ出まれバ王の左右ニハ食慾色慾の両嬖臣侍座せし
隔て衣服美麗傲然として坐せしめ其次ニハ諸の臣下次第を
守りて居並びたり其時國王ハ居直りて珍らしや淳熱ニ無恙

出て言る名のみにして実ハ屢空く先ハ无実出て弥重なり是下に乱しより
後吾国ハ再び擾乱し徽織蜂起して国郡を守る彼が有とする所なる
衣服美麗先生元帥となりて諸の英雄を用ひ種々に防禦を尽さ
すといへども賊勢強くして某軍功を失ひ国家一日一日よりより衰ふ
依て傀儡先生を招請したる所旧好を忘れず速に来り玉ふ
喜び玉ふ事斜ならず何卒美麗公と心を合せ国家平治を謀り
玉ハゞ猶此上の幸ひならんといへば淳直ハ膝を進め王命畏り候ふ
といへども其本乱て末治るハ君若生ハ実に国家を平を致さんと
思ひ玉ハゞ先君の左右に在る所の佞奸を遠ざけ而して後外寇を
治する此計を為し玉へ先に某出国の昔云ても乱後治世の要を
論じ毒食淫慾を禁じたる小君是を守り玉ハゞ佞臣奸者に

誑き惑ひ国乱を招きなんとす此のごとくこそハ幾度にても同じ事にて
全治せず出るべからず故に此度ハ徼賊追討に赴かざる前に先其佞人
奸者を追退け根ざしの災ひを滅して其後合戦に取掛るべしと悟る
所ぞく云ひければ国王ハ赤面し頭を傾て物言ハず是を受ひて食慾
色慾衣服美麗に目眩し一二人宛進み出で淳直が前に膝まづきて
かけいりに淳直汝今王の左右に佞臣奸者ありとのたまハ誰彼をさし
ての事なるや吾々已に王の左右に在て而までも奸佞の名を蒙る
覚えあるに奸佞の者ありや否や詳に是を説べし其證若
胡乱なる時ハ吾々申して汝をゆるさじと勢ひこんで詰よすれど
淳直も膝を立直し汝等知るまじと思ふや我属国へ向ひしかど
にて食慾色慾徼毒王の賂を受け衣服美麗と心を合せ

王の心を逆して悪度を勧め國禁を廢して酒肉を引入れ婦女
に交り國の元氣を乱動し遂に微賊再寇の乱を引出せし事何ぞ
ぞやと云へどもなほてハ三人ハ悪氣満て世に溢れ賊匹夫何ぞ
吾らを迷はする此の志を犯や微毒王乃賂を受しるべくハ汝
方もまた犯となり酒肉を引入れ女國と交はりし國の氣
力を長養銷散せしめん爲なり汝がでも犯庸才の者ハ病
を追ふの法知つゝく併を潤する者を若久しく酒肉を
絶ち女國交通を止むる時ハ併集へ氣結して却て元病を引
出れ故に此両事を以て國の元氣を或ハ潤へ或ハ散じ程よく
和暢せしむるを要とれ然るに此度國家の擾乱ハ此事の法
用ひたるにへ非ず全く先に微賊攻戦乃時汝妄に延立丸

蠻は諸の劇将を用ひ國中城乱妨せしむるかたなるによりて國の
精気衰へたる處へ微賊再攻へたるなり何ぞ是等を以て責
がむ罪とすべきやと吾丈高く成まで罵る城濞ハ給笑ひ
鹿を指して馬と云ふハ古の事と思ひしに汝等ハ毒を以て
薬なりしと業以て毒とし其悪を示くむべきゆゑ今汝等
が云ふ所ハ常体の國にゐるのなりそれすら酒肉色も又城禁ド
なりとてかのがら國の害にするといふべうしバ持戒の僧
尼のごとき乳都て無病長寿の國多し是城禁ドて精庇を
引出せしはおのづから畢竟國王の惰弱より起るのこと殊に嗜欲の
ごとき八國乱已に年久しく気血甚荒て治しがたし故に乱後に至つても
酒肉色事をきびしく禁ずべき事なりいうんとすれバなる

ハむすく氣血を放散し精氣をよハしハ酒ハ能氣血をと動乱
せしむ肉食ハ悪血を増長し微毒ハ悪血に和して正氣を虚
より起る者にして正氣実したる時ハ敢て起らず故に国王
に從て酒色肉食を止め正氣を補ひむる亦に汝に安んずる
以て謀をさ惑ひ禁を破りて毒の為に国の乱を生じ
ふれしく今に至りと罪に行ハれとハいハゆる道理ぞを
嚴禁として弁破すれバ食慾色慾ハ道理に伏られ諸言を
出さざりしが再び首を挙げ智者にも千慮の一失ありと云
国王を思ふに代金の聚散の為に動かさるるなれども元より
て国家乱しとなすハいうんざせん其罪を募るべし微毒王より
勝を受るりとハ何をもって云ふや其わけを聞んと詰るる時

末座より倶生神飛で出ぞく其讒迦ハ承ぢゝ手ニ在る守を
開て是此見よと一封の書状投与ふ食悪色悪ハ手に取て
是状披き見るニ中ニハ数通の書簡あり徽賊より送りたる
賄の謝答ニして何れも自筆の文書なれバ妄人ハこれ状
見るより顔色忽ち土の如く変じ背之ハ額に汗を流し
敢て再び此状開らバ此有様を見物して國王大ひに逆鱗
何り不忠不義の人非人諸官人早く彼状引出して法乃
ごとく断罪に行ふべしと有ければ倶生神是状出せし大王の
御前いさゝとながら彼等ハ全く何心より國の滅亡を乱
亦ならび徽賊の賄に迷ひ大王此悪名よ等忘己が欲を
逞うせしたるなれバ揺て一命此究し生涯禁獄に處し至べ

と淳直も倶く言葉添へ綴に命を申し乞ひ諸官人の下知
て引去しむ衣服美麗は立にもれてまゝ顔を赤めて怨
坐したる徳國王は泣と見やり其足下を以て智謀無
双の人と思ひ其言に任されば悪事に溜りかゝる大乱を
起せし也皆是我が悪より仕出したるなるれば今にいふ
まて足下を責ても其甲斐なし己後吾国へは出入
無用なり早く立去るべし誰かあるあれ引立よと下知に
従ひ諸官人どもくとたちかゝりて大元帥の鬢を取て上げ
庭上より追拂へば此頃の意気揚ゝたりしにハ恥とかゝり頭
をうく足ば宮に出て國外へ逐去けり此に於て國王は改
めて元帥の印ば淳直に渡し礼ば厚くし言ばを卑くし

深く先非を悔ひ嘆き再度討賊の事を報ぜられれば順中速に破
然として印綬受け玉ひ大王の命義に伏せり去ながら往々く
國中の容躰を察するに此度攻め来る者は廉厲ばかりにあらず
あるべからず微毒王自ら発向せりと覚ゆるなり然る時は大事
の軍にして是まで賊将なと戦ひしとは同じからず一朝一夕
には其功なるべき間心得長くして緩々と防戦し國家の
恢復成就るべし先早く軍の手配りし城せんと國王の御前
下里諸大将を呼集め暫く軍議に時を移しける所に
此度は國家十分衰弱の時なれば戦ひ難し此合戦は迚も難し先
國勢を調理すべしと一決し補中益氣湯に茯苓沢瀉苗
茱萸を差へ一万余騎を率く出て陣をなし微賊には目を

じゆんちよく
淳直嶽寿王と
苦むる図

ぜいのぐん王

うけたまはり氣血を補ハしめ延壽丸ハ逞兵四五百騎を羽
之介ら小狸依し氣血我婚ぐる小賊を打殺さしむ二将ハ命
を順し名案勢を引て打で出ぐ浮塵が散のごとくおひしれた
合戦とちふさだ補中益気湯ハ茯苓沢瀉芳菜等と共々
氣血水をみすさ調へ循環せしめ国民をうずつけ賊徒婚を
おひとれハ延壽丸忽ち逐まもて一戦よ打ちらし賊徒散
する時ハ本のごとくかくまひそむ初めの程ハ国民穀代を恐
ま延壽丸が打て出るをうんてハ本処と去てまて穀乃门より
逐出る由へ腹力脱し国勢おとろふ補中益気湯ホ力を得
そて極青し邑城お惰ろれバ店よハ其恩沢を感し延
壽丸小賊ホと戦ふといへども弟く驚ろ犯悲まを逐去ることと

なく是より國中次第に勢付き氣血水よく潤ひ小べん快
利し浮腫消ければ小賊に栖を失ふべく逃失せ國民ハ益々
ふして國家ハ政令行はるゝ飲食進んで筋力を生じ精氣調
のひ程なく静謐を致すべき前兆を顕したる淳直の業にて遠
ければ今度再寇の嚴賊ハ瘰癧腫高の事に何しれバ嚴毒大王
自ら出張して微労必死の術を行ひ國中に眷属をわかち
已に九分通り攻落し今ハ平治の氣遣ひなしと安堵しく
居る所に此頃より小賊に追々に蘇生して衆軍に追立られ氣
血水の路を塞ぐに絶ざれバ且國民皆王命に隨ふを厭ひ合戦
に怒れバ故に延壽丸ハ升に兵を増し数千騎にておしよせ
戦ひ精烈しければ瘰癧も漸く敗れをとらんと粒く

戦を操るべけしばと下知を傳へ延壽丸に精兵數千騎を與へて先鋒
先に進ませ疾速ハ数千騎にて其後に從ひ同く國中へ推出し補
中益氣湯等ハ始のごとく氣血水の路を修理し下民をなだめ
國勢を補ふて惰る事を退け郭將軍徹毒王ハ大軍を率て痢癧と一
手になり國起を再んで進む所に前軍の士卒忽ち止て茶軍
前面に屯したりと告ければ徹毒王ハ痢癧を呼出し徹業の勝敗
此一擧にあり汝先陣ヱ進んで試に一戰を催ふせよと命ずれ
バ痢癧ハ領掌し逞兵四五千を引て進ミ出で大音挙て徹毒
大王法號の前を遮るハ何者なるぞ早く路を開ずんバ斧鉞忽
頭に臨んと罵りける声未ざるに延壽丸馬を跳してかけ出で汝ハ
痢癧腫なるに非ずや先度の合戰に汝を打もらし逃退かさ

なりし尓今亦自ら来て死を促ハ能く悪縁の深き者なりけん
先海を打殺して後ニ儼毒王を擒ニすべしと鎗を捻てさゝえ
寄る癲瘋も連環搥を打ふり支方の士卒も将椅を把ひ入
殺まで戦ひけるが国中已ニ勢ひ付き人民攻戦を恐れざるが
故ニ茶軍愈威を振ふて切立れバ儼家遂ニ敗色ニなり後陣
をさして引く茶軍も戦ひ疲れしかバ殺て追ハず左右ニ
分て息を休ぎ二隊ニ陣して扣へたり次ハ淳虚が本陣の勢
と儼毒王の旗本の勢と迸と押よせ支方互ニ攻鼓を鳴し
囲を衝て勢ひを示して向眼合ふ所ニ儼賊の軍門支服ニなれ
中央ニ儼毒大王衣冠を整へ車ニ乗て精兵ニ左右をまもらせ
志づ〳〵と推し出し進ニ淳虚を指してかづ〳〵しやせる実淳虚也く

の岳を以て安んぞ我勇気に伏するべきや且汝未だ知らず薬物の種姓を知らば延寿丸とは雷震徹勅散とは般郊治瘡丸とは辛申奇良湯とは侑邑考なり皆我ろへたるが由へに神通不測ハ妙にして自在なりざれども其勇に於ては全くかなふまじ汝が弱気を破んとして嚢の物を取るより易し其上我此世間より大公望と一心に祈念し神符を焼く天地と寿まもれバもろや汝が妖術挫け失せ一つも其功あるべからず今其證をみせん為に手づから観念して死を急ぐべしと云ける天に向て祈念すれバ空中に声ありて大公望洪より魔軍速に退散せよと二声三声呼はると斉く金色の瑞光閃き来り徽軍の陣上を照すとみへしが徽毒

且忽ち工作すくゝ車より先ゝ逆様ニ傾きられバ左右の士卒
騒ぎ狼狽ぎ扶け起して介抱し周章するを見るよりも菜軍
ハ勇ミ立ちて不体ゝ居たる延壽丸と一手ニ成て先くろゝ
あり切まくれバ敵軍ハ色を失ふて討るゝ者麻の如く七利裂
ハ歳ニ岩と立ちら敵毒をも己ニ危くなへけるが数十騎の士
卒踏ゝ止りて討死しける内ニ瘰癧腫毒柔本ニ誘ひ
へも残兵ニ下知して陣門を堅めきびしく防がせられバ菜軍
も左右ゟへ近付きえず互ニ力戦する所へ淳巫車を進め来
りて是を制し御方一戦ニ利をとる徽毒を此所へ追こめる
上ハもとより氣づかひすべきニ非ず此間ニ諸方を全く平治すべ
しと延壽丸ニ命じて瘰癧が本陣を四方より圍せその道

滷を止め又延寿丸が部下の精兵を分て国中を巡行させ
黴賊の暴民者並に国中の悪民黴賊に心を寄る者をバ
見当るまゝに討殺させ補中益気湯に命を下して
つよく調補の術をなさせらるゝ也暫くの内に国勢全く元の
如くに復しける此間に延寿丸ハ瘡癧が陣を四方より取
巻て日々に薬に攻付ち諸所の塁を悉く攻抜し今ハ纔に
黴毒王瘡癧が籠れる塁一ヶ所ばかりなりけれバ黴毒王ハ瘡癧
に向ひ兼て一度大業を興し数多の人他国を亡さんと企しく
たるに天運至らずして淳直なる兄に攻破られ多くの眷属を
失ひ剰へ我が奇術破れて再び用ゆることかなはざれバ其上敵将
延寿丸とちからの皆雷震が変身するよし知る時ハ未

ろんじゆくわん

黴毒王滅亡の図
ぜいふくロう
ろんじゆぐりん
ろひまえそれたろ
廬歴腫高討死の図

萬夫不當の名を得る瘰癧腫る最期の一戦するぞ哀れを
見らん者ハ首取て高名にせよと呼わりて驀地に切て入る元より
死を究る勇兵なれバ薬軍の先手忽ちに切崩され本陣へ
なだれかゝれバ瘰癧ハきと見る間もなく追詰め本陣まで切こまんと
勇を振ふて悪戦す延寿丹是を見て拙き味方の逃様ゐ
さらバ此敵と打留て臆病者の目をさまさしくれんと馬を飛して
追付きよりて瘰癧先程よりの働き最期の一戦目ざまし
きこゆるハそれがしが冥途の引導をわたしてとらせんと[illegible]
つ鎗をしごいて向ふてさゝバ瘰癧ハ弱りて一言の答にも及ばバ
血に染たる太刀を打ふり大悪人人まぜもせず戦ひしが瘰癧ハ
数刻の戦ひに力尽れ延寿丹が無双の勇に敵することを得ずして

遂に馬より下に突落さる大将已に討れければ小卒ハいづくでの
全きるすとをんやするが内に崩れ立ち乱軍の中にのこしバ命を
殞しけりさらバ此勢に営中に乗て入り残兵を駆り出し嶽
毒王が首を討とらんとよと延寿丸諸軍を下知して陣門を打破き
ひらくと追ひ入て見るに営中ハ無人場となり残兵一人も見えへ
ず在陣の中央に微毒王と覚しく衣冠のまゝにて端座し
宝剣を以て胸元を刺通し自害してありければ延寿丸ハ傍
近く進み寄て首とらんとせしに微毒王の霊魂猶ありしバ怪に
これハ雷震が変身なり海が妲己にて立し殷宮に誅
せられしより生を転して桐起して止ず今も又業病の一対となり
此所に於て海を誅伐するぞと彼宝剣を掖みて細首中に

打落しければ不思議や切口より白気濛々と立上りて其中よ
り黒色を發し悪念とぞまうしば病となりて人体國と云ぞ
さんとせしに姿を以へる故に通力およろへ汝等が此人体國を守る
護すると成しば一生の業と思ひ共に戦ふて遂に此賊を
取れ又智勇汝等に携へりされバ此後汝等が向ふ國へハ
再び姿を顕すべからば今ハ本の栖処へ帰るなりと云ふかと
思へバ白気忽ち中空に集りやがて跡なく消にけり業軍ハ
瑞を見て勇み悦び大毒王主従の首を器に入れ其ハ
陣屋とも焼払ひ勝鬨を上げて引上れバ淳忠ハ延寿
丸が毎度の功を褒美し今ハ國中全治したれバ凱陣すべ
しと諸方へ向ひたる業軍を召し返し総軍勢をまとめて

王城さして帰り入る國王ハ是を聞き悦びに堪かね○諸官人と
共に遠く城門の外に出で是を迎へ先導となりて皇城
に誘ひ入す淳塵ハ城中に入て國王に拝謁して軍の次第と
猶又嚴毒王主従の首を実検に供ふれバ國王ハ淳塵に
向ござるてかゝる凶賊を容易く討とりたりと実に天神
の再来と謂つべし先凱陣を祝し一献を進めんと是より
大に宴を設け三日が程山海の珍味を尽して饗應し寳
蔵より種々の奇貨珍物をとり出し淳塵に褒美を送り
猶いつまでも此国に住し玉へと云ふに淳塵ハ是をいかにも辞く
ハ只悪徒誅伐の為に来りたる者なり今已に諸國の賊去
全く亡びぬれバ鬼神夜叉の如くにして暫くも猶豫しがたしと

に七国王ハこゝに於て七十余の人民已に塗炭に溺れたる
が君の力によりて再び蘇生し殊に我国ハ一度ならず
二度まで必死の危難を救ひ玉はる大恩報じがたしと訴へ
然るにとも〳〵今暫く逗留し玉へとねがふに止むれども
淳直ハ固く辞し功成名遂て身退くハ天の道なりと固
兵ハ凶器なり無為の時に用ゆべからず且軍の諸将とも
めらるゝも今ハ其用なし某又軍に離れて住する所
なし速に退散せんと留むべきけしき見えざれバ国王も今ハ
其言を屈しがたく、さらバ別れの宴を催さんと群臣に命じ
て、まづ以て酒肴を安排させ伎楽を奏して興をそへ
もてなし甚だ丁寧なりかくして淳直ハ国王に請て宝を

收め受る所の恩賞珍貨等尽く群臣に分ち散じ諸家
將に賜ひと旦くて帰り去らしめ其後四天王と共に國王諸官
倶生神に別れを告ければ皆く涙をうかめて別れを惜ミ遠く
送つて郡外に至ると淳于ハ是を辞しぬれども猶迄ハあら
じ言者是より帰り玉へと軽く云へバ國王諸臣倶生神名る
残ハ更に尽ざれども共に行べき身に悪ざれバ遂に國界
に於て袂を分ち右と左へ別れけりかくて五人の者ハ冥界
を出てより虚空遥に飛去て本の雲間にたどり付き
互に顔を見合せて恙なるを祝し先本の躰に成べしと
延寿丸ハ已前の如く法を行へバ五人の形ハ消失て本の
如くなる身体となりしが雷震ハ淳于に向ひさうらふハ是

より彼と劣れん此頃の合戦まで戴毒追討の意味は悟
り玉ひつらん此後はいくまでも戴毒と合戦の時は[illegible]早速
うけつくべしと云へば淳亜は是と謝し此頃諸国の軍に打
勝ち名を揚げたるも全く諸君の勇戦と太公望贍に
我が身中に分入て守護まよれよりてまり諸君天庭ま
帰て玉ひて太公望に宜しく我喜びを傳へよと云内
に雷震子は已に雲と動じ身体起し云いるゝに心得
よりてこそ見ん集に入るべくされ足下もまた云れたまへと
云ども淳亜は此人の英雄に別るを悲しびは惟く悲しよし
て去て左るとは雷震は見て大に叱り足下は頃まで大
元帥として我と共に賊国に臨み命を的にして勇威を

振ふる者が今暫時の別れを惜みて児女の声を兆し未動て返
玉ふハ甚だ似気ない一刻も早く御身の内へ帰り玉へと浮虚
が答ふることを笑て雲の上より推出し他人の姿ハ雲に隠
れて失になり浮虚ハ中天より真逆さまに落されけれバ
転動して我を忘れ覚ゆれバあつと叫びたる其声に我が
耳に徹し愕然として驚き覚れバ只是南柯の一夢にし
て其身ハ本の書室の内消んとする残燈の下れ机にかゝれ
てうつむきに居り覚て後も心恍惚として暫ハ夢覚の境
を弁ぜざりしがやゝ暫くにして我に帰り夢中の事を
考ふるに人躰国とハ人の一身国にて主人公とハ心なり倶生
神とハ守り神なり（倶生神ハ別るれども今ハ借り用ひて守り神とし）食慾色慾と云の

淳直夢覚るの図
らいしん
まんしん

慾情なり諸官人とハ心の枝葉にして国民とハ神経にようり
血肉等ハ諸物なり賊徒ハ即黴毒某軍とハ薬なり扨ハ
我も多年此病の治術に心を労しけるに神明是を憐んで
人身の容躰病の軽重薬の活用等を夢をもつて知せ玉ふ
者なりけん又彼の天王の内治瘡丸奇良湯ハ一人是を用る
者なれども其加減の妙ハ此度の夢にて発明す延寿丸嶽
効散ハ我久しく其方を考へけるといへども未だ用ひざ
ありしが是も夢の意をもつて推しれハ必ず死枯肉骨の能
ありしと其夜の明るを待て次の日より三品の薬を製造し
是を病人にあたへ試るに夢中の功にすこしも違ず瞑眩緩して
速効あり実に奇代の良薬なれバ淳速ハ日頃の望を成就

志かりと大ひに喜び治瘡丸奇良湯に合せて微業の匠天王と名づけ病の軽重病人の虚実をとりて是を用ひしかバ此手にかゝりし者一人も治せざるハなく其名大ひに顕はれ病を托し薬を乞ふ者門に至りて絶ることなし是を[illegible]く後の患すれバとて暇あるごとに淳速自ら筆を染め詳に夢中の治方を記しけるがやがて五ツの巻となりぬ元より人に傳ふることを欲せざれバ只独閑の楽しみに備へけるを友人何某謄写をこふて止ざれバ遂に其需に任せ借しあるハ又写さしむ其人又是を他人に借し与へ次第に写し傳へける故に此書今盛りに世の中に行はるゝ事とハなりにけり

附録

黴毒の病原を論ずる諸家の説さま〴〵なり陳氏は嶺南の地より發るといふ黴瘡秘録に云く嶺南之地卑溼而暖霜雪不加蛇蟲不蟄諸凡汚穢蓄積於地遇一陽來復溼毒與癘氣相蒸物感之則黴爛易毀人感之則瘡瘍易侵と云云西洋説を唱ふる者は陳氏が説を破して嶺南の地より起る者ならば古よりあるべきに上代は无くして明末陳氏が時世を始て起るは何の故ぞ其説甚だ不當なり元來黴毒の濫觴は紅毛フランス國人紅毛阿蘭より一千四百九十四年日本明應三年に當てアメリカ國を見出しアメリカ

國アンチリス嶌を攻侵財寶を掠め且又婦女を奪ふて船中に收め是を賣る者悉く黴瘡を發し是より紅毛國に流行す故にフランスポツクと云ふポツクと云ふハ瘡といふ義なり病名をヤウス病といふ其の後十年を經て唐土廣東の湊に紅毛貫舶來りて廣東人に傳染せしむ故に唐土にてハ廣東瘡といふ其後日本永禄十二年に蛮國船入津し長崎に定め異國人より長崎人に傳染せしむる故に其のをハ唐瘡と云と云て是等皆空論にて取に足らずとアメリカといへハ日本東南にあたり数万里を隔て廣大无辺の大國之此國の土人此病を得るものへんハいうんざや紅毛人も

知らざる華人も知らざる日本人は猶知らざる余が意を以て云ふとすれば此病は天地間一種悪気の感ずる所にして天稟の毒ある者はこれに感じて病を発す人より人に傳染するも皆是天地間の悪気ありて然るに強て病原を論ずるは無益のことなり故に紅書に微毒を悪蠱の霊は所為とするも其知りがたきを示すのみなれど乾坤一種の邪気とおもへばことすむべし凡そ陰邪の気の凝集するところは皆毒となる獄舎の地は罪を犯れ者多く牢舎に入る者始終ありて此牢中に毒気ありて繋まる二三ヶ日入牢し赦されて家に帰り数日の後牢毒を発して疥癬のごとき瘡を発す俗に牢瘡と

いふむ熱気甚しく若瘡を発せざる者は周身疼痛
して其熱気傷寒の劇症の如く死する者多し然し
あれ此毒一度病んで愈ると云へども再び入牢すとも毒
気を感ずることなし是未だ書に云しおなじく痘瘡麻疹
牢毒なれども其毒酷烈にして初発の時病ときびしく
邪気と正気と戦ふて重き者は命を殞し愈る者は
邪毒となりて天禀の毒ありたる其身に和すべき毒あるひ
故に再び感ずることあるは微毒は其初発邪気と一血気と
逆易き故に発熱もせず不食もせず重からかかることと
なし而して其毒は容易に接る者おしなべて是佛家の
破石断藕の喩のごとし一概に害となさざる者は又一本

は平げ難きものなり初発後の下痢などには膏薬或
へ付薬又は十日廿日の薬にて一度治すると見へ何より
心易き病の極と思ひ薬を服せしめ劇剤と云ふ毒合
膀胱を傷ます其物を錬まする血気を攻め病毒深
入して或は目を潰し鼻を損し耳を聾し声と唖絶
或ハ手足屈伸ならず或ハ奇石怪岩のごとき面体と
なり恥を終身に遺し或ハ命を殞す余が父母も此病
に罹りて天年を終ずして世をさり余も又此病に苦しむ
こと数年種々の方剤を用ひるといへども露も寸効ある
ことなし其に於て一医生に請委しく病苦を演舌し彼
のぞく世に在て長く苦しまんより速に死するもまさ

幸ひなるかな故にいかなる劇薬も怖るゝ意医ハ所くハ十死一生の劇治を施しまへと乞ふ彼医生さうバ軽粉剤の中七寳丸を絶ずして用ゆべしと下剤七月ぶんを服せしむ第三日ふいたりて口中腫いたむ残る三日ぶんを口中痛んで丸薬服しがたきよりまた二日のゆへ朝一度ぞのこんバ服し尽す其夜より口中大に爛傷し涎沫を吐くるゆゑ毎日二升ばかり此のごとくなる二十余日口中ハ次第に治して病毒ハ更に減ぜバ彼医生の云く是薬力足ざるゆゑなり猶七宝丸を連服すべしと又是を用て服ること前年十一月より翌年六月に至りしかども未だ其効あるを見ず此時ハ身体羸瘦し血肉枯て居て残るハ骨と皮と

のこらず此のごとく剋攻をなして動かざるが故にこれより
服薬を止め精気を調へんと肉食すること六十日ばかり
精力復し肌肉生ずといへども厳瘡は益く甚し其後
又嗅薬を用ひたるに又七日より涎沫を吐こと五十余日に
及んで瘡毒半は治したるに似たれども終に全治ならず
故にこれをも止めて暫く治療を怠りたるに病毒
此月に再発し其翌年三月頃には苦痛前に加倍
す此時始めて延寿丸の方を発明し是より此此病を治せんが為に懐中を発して医と
なりて業方を撰みて日く問ひ習して是を服するに口中腐爛せず涎沫も
吐ざれども漸々に快復し凡三十余日にして速る事なく
全治す然ば連服すること百余日天癘の毒病毒ことも

尽たるゟ其後二十余年の今に至り再発ハ勿論なく伝
染の憂ひを免れし是即ち夢中に浮世が云ひし如く天
罰の毒尽るときハ其身に和する毒なれバ故に再び伝
染せざるなり故に厳毒を蒙りたる人別して夫婦たりとも
其余殃に続く病根を断すれバ一生伝染の気遣ハ
なし若根治せざるときハ己も一生涯苦しミを他人にも
伝染せしめ又ハ夫妻子孫に其毒を遺すに至るべし
此病を受る人ハ篤と利害を弁へ全治の道を考べし
医家も又治療に心を入れて深く誤なき様にすべき
なり余が前年の事を今にして思へバ悉く誤治なる
ゆゑ一二ケ年の間無益の緩剤を用ひたるも誤なり又

痃癖丸を以て八ヶ月の間剋攻せしも誤りなれ五十年の中へ無益の苦を受しより是を今治療せば先せんじやは緩剤の山帰来剤を一剤用ひ若功なくば七宝丸を一剤用ひ是までは口中腫れてあるくば又加倍して用ひ口中腫痛むまでありて病治せざれば口中治するを待べく延寿丸を用ゆる程なれば五十年の苦をいたすく只四五ヶ月よへ全治すべきなり今世上には余がごとく治療を誤りて数年苦き病薬の為に身代を失ひ或は廃人となり或は非命に死する者其数挙て計ふべからず傷べきの甚しきなり余が此書を著はすは是等の衆の友と世に諭し長く黴毒の害を免れ令んと欲するのゝ徒まべ

此病を憂ふる者ハ此書と附録の黴瘡雜話とを熟讀て其道理を能く心得而して后病の有さるにより不用ふべき薬を用ゆるすべハ不実の医者まゝこハ半識の医者の業を用ゆるにハ遂に携って无益の月日も送らバ无益の金銭を費さバ病毒も速に拔く再發もせバ再び傳染することも无るべし此書に載たる治術一つとして虚妄あることなし若延壽丸黴毒散の二方をあらハに出さバ天地神明に憚れバ大人君子に慚べけれバいかんがせん浪遊无禄の医生すれバ餬口の種に此二方を秘して說ハざるハ心中に深く愧る所なり看官諸賢幸に優察を垂玉ふべし

○自在衛門國の合戦ハ遺毒にて周身をいくゝ瘰癧を發せし症なり葛根加朮附湯ハ其薬力足ず治瘡丸山歸効散を兼用するに症に應ぜざる故是をやめ其頭眩の治するを待て延壽丸を与へ効を得されども瘰癧未ざ全治せざる内に延壽丸をやめたる故再發せし㕝他医に欺かれ无益の薬を久服せしめ病薬のために精氣衰へ腹力脱し虚熱を生じ大便自ら下利身體枯痩し必死の症になり始めて心付き又前医に託せしに先補剤を以て精氣を復し自下利を治し延壽丸を与へて病毒を攻め精力復するに随ひ延壽丸をほし用ひて全治したるを忘れ者なりすべて腹力脱したるものハ延壽丸

黴毒散治瘡丸等を用ゆれバ大便下利する者ある故其
始めハ少しづゝ与へ腹力復するに随ひ多服せしむるもの
なり○長録国の合戦ハ下痢骨にて在りて下部より血熱
甚しく下痢腹痛するゆへ大黄牡丹皮湯を与へて熱
毒をくだし延寿丸を用ひて速効を得るを第一とす
○万吉国の合戦ハ黴毒上攻して結毒と成て咽喉をい
たみ頭痛をなし又肛門腐爛腹痛し食物咽喉を下らバ
身体羸痩して精気衰ろへたる病ゆへ補剤を与へ
延寿丸を常用するに初めハ少しづゝ与へ精気復するに
随ひ延寿丸を加倍し結毒ともに根治しける故に
きものなり○毘八国乃合戦ハ蝋燭下痢と成しぬ

飯来の能瘡ずるゐ多き由へ是を分つあり又肩瘡ハ流し
ぐされ者由へ山飯来の功をれしず後ゐ延寿丸を用由る
者あり此のごとく合戦をいはく治術をあれどいへども延
寿丸ハ遺毒瘡歴下疳骨ゐミ瘡ゐ効ありて便
毒揚梅瘡ゐ効あれバあしバ只其人ゐ癒すると癒せ
ざるゐて瘡ずる者ハ是を用ひ瘡せざる者ハ薬でかゐべき
のミ此書をよう戯作すればハ只大略を挙て其用を示
す其変化細密ゐ至りてハ筆紙の尽くしがたきゐあらバ披
用する者自ら知るべし病薬の癒不癒をあふせバ是
を用ひ動の有無をいって此書ゐ出さぬ虚誕なりと
思ふんとを此為ゐ歿が故ゐ更ゐ数備を費して其由致を

殊に老婆心を示す事しかり

船越晋再識

巖瘡軍談五の巻終大尾

畫圖 峰山重春

筆耕
一三之巻 森晋三
二之巻 中彌左衛門
四五之巻 森英三
六之巻 浦邊良齋

剞劂 志保山喜助

黴瘡雑話

伯州醫生　船越敬祐著

○夫黴瘡の一症ハ中古以来の病にして未だ規矩とすべき正典なし治方ハ僅に元明の頃より聞えたり明の陳司成始て黴瘡秘録といふ書を著し治方論じ盡せりといへども專ら生々乳をもつて一概の治法をなせる故に法則一ならずして其後本朝諸家の方書頗る多しといへども亦る博雑にして紙上の空論にて其實用を失ひ人を眩惑せしむる者のみ多し元より取にたるべき者なし又紅毛人のそつぴるどろしをかるめる等も亦生々乳の類方にて彼治して此治せずて陳司成が曰く此病源ハ嶺南の地より濫觴して餘波遂に通國におよぶと近代本朝に流傳して今ハ山野の僻地も至らぬ所なし或人曰く此病寒國に少く暖國に多し山中に少く

海邊ニ多く貴人ニ少く賤者ニ多しと此病ハ土地の寒暖ニハよらざるハ唯都會繁花の地ニ最多し抑此證身より生ずる者ニあらず此皆他より傳染せらる者ニて繁花の地ハ賣婦多き故ニ十ニ八九ハ賣女より傳染して妻妾ニ傳へ其子父母の遺毒をうけ小兒の時ニ發する者あつて或ハ成長の後ニ發する者あり或ハ晩年ニ至りて發する者あり或ハ幼稚の時ハ黴毒を病人ニ近よりて其毒氣をうくるといへども其身生涯發せずして其子遺毒を見する者もあり然して又交合して此病を傳染する人舊毒の深重なる者種々の難症を發してなかなか舊毒ある者ハ治し易し又疥癬ハ皮膚ニうけて毒のうすく黴毒ハ臓腑ニうけて毒深し凡そ今時世上ニ黴毒より生ずる病甚だ不少れども能是を見わける者少し或ハ癇と或ハ痰或ハ疝積或ハ血逆或ハ痛風あるひハ勞瘵或ハ菜毒等と名付て誤治せらるゝ者甚多し

○黴瘡秘録に曰く交媾して精を闘し氣相傳染すること一たび其毒に感じて
きむ酷烈常に匪ず髄に入肌に淪み經絡に流連す或ハ陰に中り或ハ陽に中る或ハ
内に伏し或ハ外に見れ或ハ臓腑を攻或ハ孔竅を巡る始終只一經に在者有
經を越て傳る者あり經を回て傳る者あり毒本經に伏するものあり
形證多端にして治法各異なり即毒腎經に中る如きハ始め下疳を生じ
継て骨痛を瘡耳内陰囊頭項背脊に標て形ち爛柿の如し名づけて
楊梅瘡といふ甚しき則ハ毒陰陽の二竅を傷り心に傳へて大瘡を發し
上下左右相對して痺痛し心に連る肝に移るときハ眉髪脱落し眼
昏く涙多く或ハ爪甲に瘡し毒本經に伏して偏正頭痛を作こと甚しき
則ハ目盲し耳閉るにいたりてハ生嗣壽しからず久しき則ハ毒發して囊表を穿つ
毒肝經に中るときハ先便毒を發し嗣て筋疼を作し瘡耳項脇肋に標て

形ち砂仁の如し俗に砂仁瘡をとつて之を名づく甚しき則ハ筋委て起ず
脾に傳ときハ四肢塊を發して痛楚し或ハ腿膁を蛀爛を心に移ときハ瘡と
生ずること痣の如く痛痒交作る毒本經に伏されで大筋微く疼む久しき則
毒頸項両膝に發ハ毒脾經に中されバ瘡髮際口吻に標き或ハ肛門に堆し
形ち鼓釘の如し俗に廣瘡をとつて之を名づく甚しき則ハ毒臟内に伏て腎に
傳ときハ骨痛く髓烈く塊を百會委中湧泉等の穴に發す肺に移ときハ
肌膚に癬を生じて花色紅紫の如く絪遏して即ち白癜と成つ毒本經に
伏されで斑を發して丹の如し久しき則ハ毒腸胃に結され毒肺經に中れで瘡腋下
胸膛面頰に標き形ち花米の如し俗に棉花瘡とよつて之を名づく甚しき
則ハ毒咽嗌に聚る肝に傳ときハ筋疼を作し月郭空を過ぎ或ハ天陰申酉の
時ごとに疼を作し腎に移ときハ腎臟風を作して痛痒交作る毒本經に伏されバ

赤白癜を生ず久しければ則ち毒膺臆臂腨に結きて毒心経に中れば瘡肩臂両
手に標まで紫黒にして酷だ楊梅に似たり俗に楊梅瘡とて之を名づく
甚しければ則ち毒肺に及て攻肺に傳れば喉癬を發して漸く鼻梁を蝕し多く
痰唾を作れを脾に移まで鵝掌風癬を生じ手足起止随に毒本経に
伏さしむで十指流痛を不れば則ち毒古本を攻め或ハ毒を小腸に結す夫
結毒者黴瘡の毒氣四肢百骸孔竅經絡に結して散解し易からざるを
痛をなし腫を作し久しければ則ち塊破も潰爛して已まず此證を治せる者ハ攻補
内外をかねて攻る則ハ毒氣去り補則ハ正氣強く經に回し邪の湊る所其氣必
虚なし虚者空なり無なり諸を國内虚なる則ハ人民離散して百禍起易く
譬ば人の虚なる者も又猶是のごとし又曰其虚を治せる者能く人ハ安ぞ
其餘を問んとせバ益し言ば虚者百病の本なり宜しく首に挙てもつて諸症に

冠まで至り毒肝膽の二經に結る者ハ肉筋痛を作し脇肋に攻走り上頭に至り
下りて三焦に至る轉側艱難して手を挙ることも能ず足歩ことを能ず或ハ頭項に塊を發し
或ハ破爛上下し或ハ他經に傳へて別病を生ずることを致す毒腎膀胱に結る
者ハ内骨痛を作し上下に流注し抽掣して時に痛む塊を百會委中湧泉
等の穴に發し或ハ陽物腐爛して已まず或ハ陰嚢腫脹して潰を作りあるひハ
獨脚陽黴瘡を生じ或ハ他經に傳へて別病を生ずることを致す毒脾
胃の二經に結る者ハ外小塊を為し肌肉蛀爛蔓延し或ハ大塊を發し
て腿膝を破潰し或ハ手足鵞掌風癬を生じ或ハ他經に傳て別病を生
ずることを致す毒太腸肺經に結る者ハ喉癬を為し多く痰唾を作ことを
久しけれバ則ハ天白蟻となりて漸く鼻梁を蝕して低陷り或ハ肌膚癬を生じ
硬く隆起銭の如く色紅紫褪過して即白點となり或ハ癬を生ぜずして竟に

赤白癜風しゆう或ハ他經ニ傳て別病を生ずる事ハ致毒心小腸經
ニ結ある者ハ毒瞳仁ニ注で内障ニ似たり或ハ見へ或ハ見へざと或毒舌本ニ
聚りて腫を作し或ハ十指慘痛して時ニ或ハ瘡遍體ニ生じ内結痛し
易からざして肉爛已ざる者あり或ハ他經ニ傳へて別病を生ずることもた
致も毒ハまづ傳變せど一臟證を見もものハ半月にして愈ニ三臟證を見
者ハ一月にして愈五臟倶ニ病を受る者ハ五十日ニ足て全く愈比旨獨り得之
法已ニ印讃を海内の名公ニ經妙ハまが易く褪易きニ在り疱紫黒なる
らバ身痛苦あり交媾滲ど生嗣忘あり胃の氣の元神を伐ぞ誠ニ千古
不易王道の聖薬あり設或ハ忘ニ汗下點擦薫洗等の効驗を速パ殊ニ
知しべ毒内ニ伏して臟腑を戕賊し已上の諸證を釀成しよって薬を投
ずとも効なきことをいかさん余ハ能く日を剋して功を收め又能輕粉の毒を

抜去り身を終まで患ひくるしむと或ハ向ハ初め下疳を生じ腫爛してハやまず
骨痛を作さゞる者ハ薬を服すること十二日にして陰陽物を爛去して薬を
捲ぐれども効あらざるを蛀梗と名付或ハ寒心として薬を服する事廿五日に
して陰横痃雙生する者ハ薬を服すること十二日にして陰単に便毒を生じ
て筋疼を作す者ハ薬を服する事十九日にして陰便毒潰破して斂ざる
を名づけて魚口と云ふ之に痔瘡を兼る者ハ薬を服すること廿六日にして
陰陽物瘡を生じて楊梅堆満の如く状鼓椎の如く他處ハせざるを名
づけて独脚楊梅瘡として薬を服すること四十五日にして陰瘡を生じて
形ち硃仁の如く肉筋疼を作す者ハ薬を服すること廿五日にして陰形ち爛
柿の如く内骨痛を作す者ハ薬を服すること二十一日にして陰髮際口吻
肛門に標生て他處ハせざる者ハ薬を服すること廿一日にして陰

形ち大豆の如くにして多く四肢に見る者ハ薬を服すること廿七日にして愈胸膛
面頬先標よして形ち花木の如くなる者ハ薬を服すること廿五日にして愈上
下左右對畢して形ち楊梅の如くなる者ハ薬を服すること二十三日にして愈
筋骨疼痛天陰日処ニ遇て痛甚しき者ハ薬を服すること廿一日にして愈
毒と腿膝肩髆ニ結で塊未だ破れざる者ハ薬を服すること二十二日にして愈
塊破れて年去る者ハ薬を服すること二十七日にして愈委中湧泉玉莖百
會等の處ニ結して未だ破れざる者ハ薬を服すること二十一日にして愈已ニ破れ
たる者ハ薬を服すること二十六日にして愈十指慘痛して爪甲瘡を發る
者ハ薬を服すること二十六日にして愈喉癬日久しく天白蟻と成て鼻を
蝕する者ハ薬を服すること廿五日にして愈毒肺道を壅て時として痰を
吐て聲唖する者ハ薬を服すること二十七日にして愈毒肌膚ニ透り肢體

癬を生じ硬靨錢の如く紅紫なる者ハ薬を服すること三十七日にして全
毒手足に附鵝掌風を生ずる者ハ薬を服すること四十二日にして全
毒内分に留て蛀爛蔓延する者ハ薬を服すること四十八日にして全胎毒
兒に貽て屢瘡癬遊風丹種を患る者ハ薬を服すること廿四日にして全と云
此の如く種々精細の論説を立て乳をもつて化毒丸十二方を造り黴
毒の諸證ハ日の限りてかるゝして化毒丸を以て治せんとすれども化毒丸一方に
不應者ハ十二方皆効なし形證多端なりといへども何ぞ治方を異にせんや
只黴毒一症の変化にして其人々に應ざると應ぜざると差別ありて其不應ずる
者ハ一方を與へて下疳便毒陽黴瘡筋骨疼痛或ハ頭痛或ハ耳聾或ハ
濕眼鼻梁腫痛咽喉腐爛或ハ痔疾淋病等凡て黴毒の諸症新舊を
不問皆速に治ことを得るなり軽粉薫方の如きハ一時の効あれどもかるゝして

絡毒とありて其効いちじるしとハ是蓋実験せずして空論をなせる者也
其證據ハ病の軽重人の強弱に拘りて生質によりて生々乳を服し
て大便下利する者あり或ハ発熱して斑を発する者あり或ハ生々乳四五文
厘服して数日口中腐爛する者あり或ハ二三分服しても口中腐爛
せざる者あり或ハ悪心嘔吐してうけざる者あり病の愈る日限を記さず瞑
眩の次第を何故に示さざるや諸空論する事明らかなり凡薬の瞑眩ハ
酒の酔の如し人一口の酒に酔て苦しむ者あり又壹升を飲で酔ざる者あり
生々乳を服して速効あるあり又数日服しても寸効なき者に薫方を用ひ
て忽ち治せることあり或ハ軽粉剤を服して速効あるあり或ハ鶏剤を服して速
効あるあり陳司成與石の真する者を得ざりしも生々乳剤のことをしりて
黴毒の諸證悉治せしむべけんや生々乳其人に應ざる者ハ速効あるも座しまさ

不應者ハ久服すといへども益なくして損あるべし何ぞ生々乳のごとき聖薬とせんや
軽粉かゝりといへども志して或ハ山帰来薫方五宝丹鶏鹿散等の諸方を備へて
其徴證盡く駆除せる事を得べし其與石の真なる者得がたしといへども後
人を欺く者ありこれ已に東洞翁ハ水銀録礬硝石食塩の四味をとりて續七宝
といふものを製し軽粉服して効あらざる者を治せしむ又紅毛人ハ水銀丹礬硝石
食塩をとつてそろぴるどろアチかあらし等を製して皆良功ある者なり然ば
與石一味をとりて主薬とすべし其必とすべき者ハ水銀なりしん軽粉ハ水銀白
礬食塩の三味をとりて製して生々乳ハ水銀録礬硝石與石雲母石食塩青塩
の八味をとりて製して陳司成生々乳能軽粉の毒を解すといへども病毒と
薬毒を不知者ハ是をもて軽粉の不應者ハ生々乳を與へて効を得しと
なるべし若實ハ粉毒を患ふる者ハ生々乳をはつして霜上ハ雪にて治せず

如く薬毒を増のくあるべし粉毒にかゝる者多くは口中腫痛爛傷て涎を
生じ或は腹痛大便下利或は發熱發斑する者あり是等は數日を待ば
必自ら治すたとへば酒に酔たる者自らさむるが如し薬毒の遺るといへど
余が未だ不知所なり酒を悪む人數盃を飲で大に酔苦むも醒て後酒
毒の残ることはしらんや常に大酒を呑ものは終に酒毒を發して死する者
まるなり薬は病毒の盡るまで服するを好して平素に服するのみに
あらず世俗の薬毒といふものは皆病毒にして薬毒にはあらざるなり又
陳司成化毒丸の速功を記せるは屡つて治を謬し害むべしたとへば下
疳便毒の軽症なりともかならず四五十日は服薬せざれば全く治しがたければ
たとへ生々乳軽粉などを主とし或は薫剤等の猛薬を與へ能的中
して十日ならざる中に治したりとも其功とする薬を連服して能病根を

抜去りしむべからず再發して結毒をうるものあり各其證に志たがつて
治方を撰用ゆることを專要とす余徵證を療ずるに生乳を服して治せ
る者十に三四あり輕粉を服して治せる者十が四五ありかるがゆゑにこれを
を服して治せる者十に五六あり薫方を用ひて治せる者十に六七あり
陳司成が曰く土茯苓味ひ甘く氣平にして胃を溫め脾を健にし筋骨
を暖むることを主どる故に寒涼を過服して胃を損じ毒脾經に滞て飮食
不進者に此よろしけれバ効を得べし若毒他經にあつて脾胃健旺の者ハ
縦多服すとも又功なし脾胃虛して泄瀉する者此を服すれバ實に奇効
ありこれ是もまた空談なり壯健の者も山皈來劑服して速功有なり
脾胃虛泄瀉の者も効あらざるなり凡五宝丹雞鹿散山皈來劑等
皆山皈來をもつて主として諸藥を與て治せることその十に二三なり其他

數百方ありといへども速効ある者稀なり先に妙薬奇覧黴瘡口談の二書を著し印行して世に弘むといへども俗よきやりがたき事を思ふが故に今また延寿丸　黴効散　治瘡丸の三方を数年試みて奇効を得たるもの數方をえらんで黴毒の諸證を治するの捷径要法を述ぶ夫延寿丸の一方は生て乳をもちひる續七宝のごとき猛烈の薬にかゆるもの也へに其瞑眩なく緩くあくまでも其効速なりけいふん剤かぎ薬のごときは口中いたまざれどもけいふんかぎ薬をもちひると癒ざる凡毒を用ひて効あらざる者に用ひて妙功あり

○凡病人臨に大庭両額陰にして黯色黒色を帯者は痼疾結毒或は遺毒の兆也

○聲音重濁なる者は結毒の兆なり

○金瘡灸瘡愈がたく愈て后紫黒色あるときはかならず黴氣あり

○凡黴毒家の脉沉渋遅滞を常とし沉結は痼疾なり若浮滑數洪大を

見ざるものハ必ず他病をさしはさめり此病陽分に些少の瘀を発することあり

毒陰分に根ざせる者故陰脉を常とし陽脉を変とす然れども脉ハ人々の生質

によりて不同あり黴瘡を発すといへども其毒軽き者ハ脉常の如くなる者あり

故に脉論のことハ其人々の平脉を不知バ些少のことハこゝろへがたき者なる也ただ脉

候腹症ハ勿論その形相音声より飲食等のことまでも参考して治方を投ずべし

○凡腹部を候ふに外筋骨疼痛ありて胸肋等それより腹皮攣急し

或ハむねにつかへ或ハ心下或ハ臍下等堅満し久日いゑざるものハ黴毒之兆等

の症ハ四逆散小建中湯附子湯等を兼用すべし又下府便毒に血燥を

げしく小腹攣急し紫黒色にして疼痛甚しき者ハ大黄牡丹皮湯を兼

用すべし又肌肉枯瘦し腹濡弱にして大便溏なるときハ劇治すべからず

○凡風寒表邪にして頭痛寒熱有者ハ先其症を治して然後に黴毒の治方を投ずべし

○平素積癖ある者ハかならず先積癖を治めて后黴毒治方を投ずべし

○黴毒治を誤り一身羸痩して寒熱往來し或ハ盗汗出虚咳白沫を吐或ハ自下利脉数を見る者俗に湿労と云多くハ難治の症也初学の者ハ必ず治方を投ずることなかれ

○下疳瘡ハ交合して其毒氣を傳染さる者其初め多くハ前陰に瘡を生ずこれ下疳なり其瘡形炎瘡の如く痕あさく其色うすく紅色にして疼痛あさき者ハ其毒かろし痕深くふちたかく其色紫黒色にして腐肉ありて膿稠く臭氣甚しく疼痛劇者ハ其毒深重なり其色灰白にして膿清稀脉微濇なる者ハ虚弱と知るべし又陰頭水腫してやうやうかゆく其色かハらざる者ハ毒かろし陰頭紫黒色小腫ありても堅して疼痛甚しく臭氣近づくべからざる者ハ毒深重なり又皮うすむりの内より膿汁流出皮むけざる者ハ衰て下疳となり又疼痛最も劇しく漸々ふさがれようくさりおちる

者を蠟燭下疳と名づく陰茎中時〻痛時〻痒く時〻膿汁出小便常の如くなる者ハ淋病にハあらずして内下疳瘡なり是小便道に瘡を生ずる症也

○陰門肛門のほとり或ハ腿の邊又ハ脇の下等に灸瘡の如くなるを生じ凸する者ハかろく凹する者ハおもし いくつも發して膿汁或ハ黄なる等出ることあり是も臭氣あるもとのハかろく臭氣甚しき者ハ其毒おもしとい

○肛門腐爛するひハ腫痛或ハ破れて疼痛して便通のときハいよ〱破れて下血する者痔疾にハあらずして是下疳瘡と同事なり治方も下疳の如し

○陰門ただれるを俗に帶下腫といふ是帶下にあらず是も下疳の類なり其色變せずやう〱かゆくして痛みある者ハかるし其色紫黒色にしてかゆく疼痛甚しき者ハおもし不日に膿潰するもありまた膿潰せざるもあり

○淋疾其證小便頻數或ハ滴瀝して澁り痛むより淋疾と名づけざる

なるべし其小便止りて餘瀝あり或は氣淋と云ひ尿血結して陰茎痛むを血淋といひ茎中痛み努力がらゝ支かゝまりて沙石の如し是を砂淋といひ尿出て稀だるゝに膏あぶらあるを膏淋といひ又勞倦によれバ即ちおこるを勞淋と云五淋赤白ハ膀胱の蓄熱によるなり小便自出て覚えざるを遺溺と云

○一種淋に似て淋にあらざる者あり小便常の如くにして頻數せバ小便さる毎に痛し或ハ痒く常に膿汁漏下して甚しきときハ尿道に塊の如きものあり或ハ生じて疼痛し或ハ陰頭腐爛し或ハ小瘡を生じ小便ハ漏出るあれあり是を内下疳と名づく是も黴毒を病る婦人と交合して傳染せるものにて極悪證に至りてハ陰頭腫皮をかぶりて或ハ下疳となり或ハ蠟燭下疳となり或ハ陰嚢會陰肛門の邊に腫塊を生じ疼痛して終に膿潰し漸々に瘡數深くなりて小便膿汁漏出て不止陰嚢より肛門の邊に至りて

紫黒色ニ腫て岩瘡の如くいづれも小竅を穿ち皆悉く小便漏出其瘡口閉
時ハ疼痛し四五日或ハ七八日ニ至て膿潰す其時ハ暫時疼痛忍易且是火急
ニ死する者ニハあらざれども不治の證なり是を名づけて淋漏或ハ囊癰懸癰共云
○痔ハ眼鼻肛門などニ生ず俗ニ疣痔といふハ肛門の邊ニ疣の如きものを生
ず男女ともニ多く有ことなり痔漏ハ俗ニあなぢといふ是ハ氣欝瘀血酒毒
食毒或ハ黴毒より生する者亦多し未だ漏とならざる者を實とし既ニ
潰破して膿血黄水ながれて漏出穴をあけたるものを虚とし又きれぢと
いふ者ありて大便燥結する時ハ破れて血出づ是も黴毒ニして腐爛腫
痛すれども治し易し凡つぶぢハ突起する肉を切はなち肛門へ近きハ糸をか
けて肛門へ切ひらき肛門より遠きハ腐薬をもつて漏管をとりて治する者も
あり但其毒深重の者ニ至てハいづれの治術を施すとも肌肉枯瘦して遂ニ

咳などいで白沫を吐或ハ盗汗を発し労瘵の如くに成て死に至る者あり
○脱肛ハ肛門脱出るあり此證大病の后或ハ老人或ハ産后或ハ痢病の后
或ハ平素大便秘結する者等にあることあり治方ハ只氣を補ひ血を
養ひ陽氣を升提せしむること要とす其年月を歴る者ハ全治さする方有がし
○便毒ハ腿のつけねに腫塊を生ず名づけて便毒といひ或ハ魚口ともいひ
或ハ横痃ともいふ血分によりて発する者ハ腫起疼痛して一時に膿潰して腫
消じ痛止又氣分によりて発する者ハ満腫に至らず疼痛も劇しからず
膿潰をなすといへども黄水など少しづゝ出月日を歴て瘡口愈ず膿汁漏出
連々に瘡口を生じ皆膿水を出して、わづかにして其悪症に至りてハ瘡口爛
漸々に口廣く深くなりて愈ざるあり又便毒を発するといへども腫張膿潰
に至らず不日に消散して変症を発する者あり凡便毒其色紫黒色

まして堅發熱焮疼ある者ハ毒重し其色紅色にして腫張せるし
やハらかにして發熱せざる者ハ毒かろし凡血分によりて發する者ハ治し
易し氣分によりて發する者ハ治しがたし所謂腐肉便毒と云ハ是なり
○陽黴瘡ハ表發するゆへに名づく或ハ楊梅瘡或ハ綿花瘡或ハ砂仁
瘡等其他名状多しといへども皆同物にして瘡形大小あるのミにて治
方異なることなし此證頭面胸腹脊腰四肢をきらハず發する者あり
或ハ眼中鼻中咽中等にも發することあり其瘡形斑の如く瘡痂なく
寒熱なく骨痛せざる者ハかろし瘡形大にして凹ミふちなく臭氣甚
しく疼痛して膿汁出寒熱の往來ある者ハ其毒重極悪證に至てハ筋骨
疼痛を兼るものあり頭痛を兼ものあり或ハ下疳便毒等一度に發する者も有べし
○筋骨疼痛ハ多く下疳便毒の變症にして其初發腕足首膝節手

首臂肩胸腰等ふといたみ漸々に痛強く百節までつり手足の屈伸なら
ず或ハ起居するにも甚しく終に至りてハ骨節腫痛昼夜止まずして或ハ足水
腫の状の如く腫あるひハ頭痛破るがごとく或ハ耳鳴耳聾をなす
最甚悪證に至てハ肌肉枯痩をおこし或ハ寒熱往来し終に結毒に至るべし
○痛風ハ四肢腰脊肩胸等に走痛し或ハ百節腫痛しあるひハ發熱
悪寒し其痛み昼ハ易く夜ハ劇しけれどおさまり又鶴膝風ハ足疼痛
してつる足のごとく膝節大に腫痛するあり此三症ハ徽毒にあらざれ
ども年月を歴るときハ徽毒の治方を與へて奇効を得ることあげてかぞへがたし
○結毒ハ徽毒初發のとき膏薬ほか毒薬等を以て頓治をもとめ薬を服さ
るとも全く未だ病毒除ざるに服薬を已め或ハ酒色の肉食をつゝし
房事をおかせしゆへに毒氣再び發して結毒癈痼をなせるあり其の

毒頭を攻るときハ頭痛を悩しまたハ頭面の骨腫漸く小潰破ま骨
を腐しまたハ頭面瘡を発しと久年愈ざるものあり其他その毒の
依止る所ふ志たがつて其症各異なりその症大略下ふ記を然して知べし
○瘰癧咽喉より頸筋ふ結核を累々と生じ此を瘰癧といふ其色へんせ
ず漸々ふ長大ふなり累年不治者ハ悪證ふて諸治効ありがたくはいふ
盗汗労咳を生じ漸々ふ肌肉羸痩しつひふ死ふいたる者多し是を真の
瘰癧といふ又一種結核を生じ不日ふ色を変じ紫黒色ふなり一口潰て
黄水稀膿を生じ揃口を収むれども又一口を穿ち連々としていたり漣
肩井の辺より天突缺盆の辺ふいたる俗ふ気腫瘰癧といひて皆黴毒
より発せる者なり煎薬ハ葛根加朮附湯よろし方ハ黴瘡約談ふ志るせ
○黴眼其初起眼目赤腫疼痛眼胞腐爛或ハ星を生じ或ハ白翳をなし

或ハ朦朧として物を見ること羅を隔たるが如く内障外障をも逼目盲不治となるもの多し

◯毒鼻につきたる者ハ鼻或ハ紫黒色となりて漸々に蝕爛し其毒おかされたる者ハ鼻梁腫痛鼻竅ふさがり終に潰て鼻梁陥下者あり或ハ毒頭脳に結したる者ハ脳漏鼻淵となる其證常に濁涕下て不止甚しきにいたりてハ黄水濁涕出臭氣甚しきなり以上の症多くハ頭痛を兼ると知るべし一種鼻中に痣ありて外に色をあらはさず毎月大さ指のごとくなる瘀痂出て積年不治はつけしとつひにひそかぐ事不能なるのあり

◯毒耳に結したる者ハ耳聾をなし其初發耳鳴て鐘の打る如く或ハ風の音の如く或ハ風雨の音の如く或ハ川の瀬の音の如く終に耳閉て聞ことを不能其耳元より求をおこし或ハ耳なれて聞ゆる者ハ治すべし若年を累木の音もその音もきこえざる者と久しくなりたる者ハ治せざるあり

○毒咽に結する者ハ咽腫痛声音鼻に溢て俗にいふ鼻声のごとく終に腐爛或ハ聰に穴を穿ち漸々に長大となり食する者も鼻穀より出し或ハ毒氣肺道に下りて肺癰の如く咳を生じて膿痰を吐き或ハ聲唖となる或ハ毒舌に發して舌瘡木舌となる或ハ齒齦腐爛齒を脱し或ハ唇腫痛腐爛て食

○毒胸に結する者ハ胸痛をなし心痛をなし狂妄となり或ハ腫痛久しくして潰破まて膿汁を出し或ハ稀痰黄水を出して累年不食あるひハ脇肋に結する者ハ脇痛をなし或ハ腫をなし終に痰潰て不食或ハ腹に結する者ハ痛をなし腹満をなし或ハ癥瘕急をなし或ハ徴積となり或ハ反胃膈噎となる其證平素大便秘結し宿水を吐嘈雑呑酸噯氣を發し終日食する所の物を日暮に至りて吐出し或ハ留飲心下に沸逆して喉に亂を入るごとく動き或ハ留飲心下にのびて痛をなし食するときハ痛み

益々劇く空心なれば痛ミ或ハ食して胸たゞれうとあしく悪く揣を咽へ入て吐
ある者も有り此症百薬應じがたし故ニ腹痛ある時ハ牡蛎を用ひて一時おさへ
さしおき右の諸症ニ延壽丸をつゞく此方を兼用してよろし柴胡八分半夏八分
大棗三分 黄芩三分 生姜五分 芍薬三分 芒硝五分 角石六分 青皮四分
牡蛎八分 右十味水二合入八勺ニ煎用ゆ便秘甚しき者ハ大黄を加へ大
便快利せバ大黄を止べし 延壽丸の妙なることハ此症ニていかに積燥結する
者にても二三日も服すれバ大便自ら快通すべし連服すれバ胃中
の結毒消失して病根を不除といふことなし此證大便溏する者ハ治しがたし
大便燥鞕なる者ハ治しやすく速なり大便小瀉する者ハ延壽丸も功なし或ハ久
年の悪證にいたりてハ一度速ニ治するといへども禁食を犯し飽まで食
ときハ又發してはいかに薬効あらざる事ニ至るべし故に粥を常

食として魚鳥生冷のものハいむべし此證ハ徽瘡頂訣に詳なり
○毒脊腰に結るものハ痛をなし腫を發こりて筋をひきつり屈伸ならざるものハ腐爛をなして久年不治
○其毒四肢に結る者ハ肉瘤或ハ結核を生じ疼痛潰爛稀膿黄水を出して不愈或ハ骨節腫痛屈伸ならず或ハ筋ひきつり行歩ならず或ハ附骨疽となり紫黒色に變じ骨を腐し或ハ臁瘡を發して久年不愈或ハ鵝掌風癬を發して手足夏冬となくなりこのぎれの如く破きて不治甚しき者ハ痒痛を忍て血出る者あり此證薏苡仁湯薏苡附子敗醤散よろし
○又一種結毒よりて手足麻痺者となり或ハ身體疼痛漸々不偏枯をなして中風に似る者ハ其脈微濇沉滑其腹實して動氣少く言語も錯誤し又少し又真の中風ハ其初發卒倒て人事を知らずして知覺て后半身

遂ハざ其脉浮洪大弦腹虚軟にて動悸散漫譫言狂るあり右二證ハ脉と腹をもつて分つべし或ハ黴毒治に寒熱往來形體羸痩或ハ潮熱を發し咳をなし癆瘵に似る者あり或ハ外邪の頭痛に似る者ありあるひハ脚氣疼痛ある者に似或ハ痛風歴節風に似或ハ疝毒筋攣とのふに似或ハ氣欝留滞ある者に似或ハ跌蹼損傷の痛に似或ハ帯下赤白あり下る者に似ることあり此等の證にうけてかぞへがたし各其證に随て治方を投べし故に諸病の治療ハ精しからずんバ黴瘡にて結毒生りて治せざる事あるあり
○凡黴證を治せんと欲せバ先病者に治療の道理を説べし黴毒の悪證あることハ草またしきハ芥子の如し菜熱湯の如く毒食ハ韮汁の如し草に熱湯をかけるときハ枯韮汁をかけるときハ漫延勢よくあるべし故に毒食と房事と堅く禁戒むべし房事をおかせバ百病に害ありし黴瘡の業と服する

てり氣血散亂して治せざることにて たとへ一旦治したりとも毒食房事を犯すときハ
又發して其害甚し余近年浪花に住し諸人の療治をせしに僻地山野に有者とハ
大きに異りて常に美食厚味に飽酒色におぼれる故に黴毒も又深くして
一旦ハ治しがたし殊に氣任にして病毒の盡るまで薬を不服其上毒食房事
を不慎故に再發し易く病根除き難し別て下賤の貴婦等ハ不信にして医
の教を實とせずして殘留故に已に結毒難治の症を病むといへども服薬をきらひ
適薬を服しても毒忌せずしてたゞ頓治をねがふのミ幸に薬能的中して病苦
を忘るゝゆへ忽ち薬を止め毒食房事を犯す故再害後悔の甚しきこと
此説に其道理をせまり薬を受るといへども服用せざる人自然と志のびて煎薬ハ疊
の間にうつし丸薬散薬等ハ反古籠の中或ハ床の下にかくし後日の苦ミ命を失ふ
事なきにあらず此等の病者ハ耆婆扁鵲が再來せりとも治せざること

とも久しくもかゝりしハ後日ニ證を變じて害をなすこと甚し

○世上の人薬を飲バ毒となし薬を己まバ毒となせざる者なり是心得違なり薬ニ
毒となるあれバ病の真ハけはなしゆゑニなるなれバ今治をするまでハ毒となすべきなり

○諸病の中にも黴毒の二症ハ病根深き悪症なれバいかなる妙薬にても才ニ一
廻り二廻り用ひて一度ハ速功を得るとも根治する者まれなり況や咎作して一
廻りも服薬して八十日も休み又服薬するほどにして薬を点ずるものハ病根治する事なし

○抑黴毒の一證ハ變化きハまりなく百状を見はすといへども百方を用ひるなれバ
其本ハ只一毒なれバ治方ハ只一毒を攻除の外に不足黴毒ハ火速の證ニあらざれバ他
病を兼る者ハ先他病を治して後黴毒を治すべし又黴毒治療中他病を發する
ことあり時ハ黴毒の治療をさしおき先他病を治すべきなり然れども外治ハ止るニ
およバず膏薬等ハ其まゝにて用ゆべし又潮熱起十日さかれバ寒熱往来しいつまでも

日晡よりして發熱し飲食すゝまず百薬功なき者ハ九味清脾湯を用れバ妙効あるべし
或ハ其人虚弱にして精氣不足し身體羸瘦したる者ハ大補湯益氣湯を撰み
用ゆべし小腹不仁小便頻數なる者ハ八味地黄湯或ハ自下利清穀者胃中虚
冷より附子理中湯を用ゆべし或ハ陽氣おとろへ脈沈細にして四肢微冷肌肉生
ぜざる者ハ真武湯を多く用ゆべしすべて多く用ゆる所ハ延黴治の三方を本剤として
其症に随て大補湯益氣湯八味地黄湯附子理中湯真武湯荊防敗毒散
及鼻丸再造散等そのよろしきをえらみ多く用ゆるなり又傷寒風邪等
をさしはさむ者にハ黴毒治方を用ゆべきにあらずこれによりて黴勞にて寒熱ある
ものハ黴毒驅除の剤にあらざれバ治しがたし延黴治三方ハ則驅除の剤なり
○凡黴毒を治療するにハ是まで服用の薬を聞べし是迄丸薬散薬或ハ
水薬嗅薬薫方等を用ひて口中いたみたりや否や或ハ山歸來剤五宝丹等を

剤等をも服すると否とを問ハず服せざる者ハ延寿丸或ハ山帰来剤等を撰ミ用ゆべし。たゞし是迄山帰来剤或ハ五宝丹或ハ軽粉剤などをもちひしかるゆゑ剤或ハ精光乳をもちひる等の剤をもちひ治せざるものも延寿丸などを用ゆれバ大に妙効あり。若功なき者ハだいこうさんと兼用すべし。いまだかぎらず薬用ひざる者ハ速功を得ざることあり。凡て此三方其他軽粉などをもちひしかるゆゑをもちひる生乳剤などを用ひて大便泄瀉する者ハ腹力虚弱なるゆゑ脾胃虚なり。此等ハ志して用ゆる事あらバ山帰来剤或ハ桂鹿散或ハ大補湯益氣湯八味地黄湯等を参考して用ゆべし。かならず下剤を用ゆべからず。又前文の延徽治其外眩暈剤を服して猶よろしく氣分悶して頭痛などし或ハ周身だるく口中痛ざれども不食して精氣労る者もあり。是も薬の瞑眩なり。是等ハたゞ功ありとも先ツ七日休ミ薬を廃して其ハ氣分よく食もすゝみ差りて又前方を

用ゆべし又五宝丹の方を出すといへども高料の剤にして全効を得る者少し已に
山帰来剤鶏鹿散等の切なる者ハ又効を得ずして已に癒を得ざる者ハ用ゆべし
○便毒ハまづ発泄せざる如きハ荊防敗毒散を与へ発泄して後瘡口を
愈すに至りてハ延寿丸徽毒散治瘡丸等を参考用ゆべし下疳便毒疼痛
甚しく其人壮実なる者ハ大黄牡丹皮湯を兼用すべし其人虚弱
にして諸瘡肌肉を生じがたき者ハ十全大補湯を兼用すべし
○凡病毒尽病根断るの候ハ周身小微の痛苦もなく諸瘡愈てその色
白色或ハ平色になるを以つて病毒尽て病根除くと知るべし其いろ紫黒
色或ハ微く痛苦ある者ハいまだ病毒尽ざる者なり此一證ハ其毒尽ざれバ身を
終るまで苦しむ又其毒尽て病根を除らバ再び其身より生ざる事なし此
病毒ある者ハその身ばかりにあらず夫妻子孫に伝染する也今時病毒

皆さるまでハ服薬して毒けしをなすこと専要なり
○凡延寿丸徽効散治瘡丸の三方ハ先一廻り分七日ニ用ひて口中何のこともなく
病もかるきハ薬力不足なり又一廻り分を五日ニ用ゆべし是ニてもかる
きならバ又一廻り分を三四日ニ用ゆべし此ニ而口中ハかるき事なくても病ニ効あ
らバ一廻り分を四日ニ二日づゝ續て用ひて病根を除くべし又口中きれいなれども病ニ効あらバ
日をのべて用ゆべし又口中きれいなれども病ニ効あらざる者ハ其の薬其の人ニ
不應なり 延寿丸ならバ徽効散ニ又徽効散ならバ延寿丸ニかへて用ゆべし其の薬を
かへるときハ先五七日の間煎薬ばかり用ひて下地の薬氣をさりて別薬ニかゆべし
右三方の薬ハ数月用ゆるとも薬力不足ときハ切て其薬力のなきと云ハ齦出
きれいなれども薬力なきと知るべし又始終口中ニさはりなくして病ニ効ある者
あり又口中不痛ハ病ニ効あらざる者なり故ニ口中いたむとも辛抱して病毒此

つゞろまで服薬せざれバ病根除きがたし去れども劇しくるむときハまづ薬を
止煎薬ばかりあたへて日中治まるを待て又はじめの如く用ゆべし
○凡瞑眩剤を瞑眩せぬやうに用ひてハ病根除きがたし又天宝丹鷄鹿散山豉
來剤等ハ瞑眩する薬にて薬力なれどの分量する故に何れも一廻り分服して
少しも効なき者ハ其人に應ぜざるなり連服すとも益なかるべし又よく應じて
病に効あらバ其薬を連服し病根の除くを以て度とすべし去れども薬に因て
て効あるものへ其薬を連服するに十の物を七八分まで治して今ハおのづから
治せざる薬と服するに至らずして再發する者あり是全く病に
應ぜざるなり先ハ其薬をやめ日中治まるを待て他の薬を用ゆべきなり
○夫病ハ人の心の如し同人にて其人各同じからざるごとく病毒もまたそのごとし同病證と見ても
又同薬を服して治せざる者これあるべし故に病者の富貴貧窮都會偏鄙利欲に拘

應ずべき薬を擇て與る事専要なり未熟の者本草の字言に迷ひ些少の薬
毒あれバとて無益の薬を長服せしめ徒に年月を送る中終に癈痼となる或ハ
病毒のためハ命を失ふもの少なからず余も若年のとき黴毒にて大きに悩しに
軟和の剤を種々服するといへども数年治せず已事を得ず軽粉剤なる剤を
服するといへども寸効なしかゞき薬を用ひて大に結しくなり又延寿丸を服する事
三十余日にして全治し廿年以來再発せず又薬毒の遺るといふことを知りて後
年々薬毒の害あるをおもひ常識のおよぶところなり今世の医痼疾結毒を見て
薬毒といへバおしうつる其薬毒といふ病か薬毒かなりといふ瞑眩剤を撃
て治するハ如何ぞや余が愚案にハ瞑眩剤を服して速功ある者其瞑眩剤を
連服せざる故に病毒尽ずして除毒内に伏して結を起し再発して害をなす也
是をはじめ服する薬不足ゆへに又始め効ありし薬をたるほど服すれバ全治

きゝかり去ぬれバ薬毒にあらずして病毒なること明らかなり

○近代の医ハ利欲を専らとする故に福有の者を治療するにハ劇剤を用ひて速に治する事を知るといへども多ク薬瞑眩せバ久服せざらんことをいとひて無益の軟和剤を投へ徒に年月を送る中に病毒ハ甚しくいつしか精気つかれ肌肉枯痩盗汗を發し或ハ咳をせうじ白沫を吐殆労瘵となり或ハ腹内を破り筋骨を腐し終に命を失ふもの者又多し此等ハ医門の罪人なり苟も医を学ぶ者道を守り仁心に志篤からざれバ医道の任にたへざるなり

○近来世上に倭医多くありて黴毒を治療するにハ先薬料を定め日限を定むるに十二日或ハ十五日或ハ廿日をもつて限りとしたとへ結毒なりとも全治せしむるといひて其料物を先へ是を取入るとぞいかに妙剤なりとも其日限の中に病根を抜去事ハかたしんやたまたま速効を得たる者もかならず再發して害をなすあり或ハ

或ハ痛苦ニたへざる者ハ阿片丸を与へて一時或ハ二時の間痛苦を忘れさしむ此ハ至て仮初
奇なることなれども是癌ニ効あるにハあらず唯神経麻痺さするゆゑ痛ハとまれども心ニ
痛を知らざる故なり又阿片の気去て神経の麻痺さむるときハ又心ニ痛苦
を知るゆゑまた苦しむなり其ときハ又阿片丸を用ゆ是等ハ神経をよわらす
そのくふて益なきことなり或ハそれが為軽粉を服したる者ハ軽粉毒をもつて緑バ薬が
きかぬといへて雲母を丸薬ニなし是を用ひてかならず大便をひらかしむ
べし白きうしる物あらバ是則軽粉毒の下るなりとて信物をなすべし
かとるんで軽粉が腹中ニ留るべきや其軽粉と見ゆる者ハ丸薬ニ入る雲
母なり或ハ灸をすへて其灸瘡ニ膏薬をそへ汁出るとみへて土つくが
ぬけるといへ或ハ斑猫を粉ニして膏薬ニまぜしを胡麻脂膏と名づけ痛む
処へこれをつけて暫時の中ニあかきのれ出るバこれぞ黴毒がぬけるといへるハ

五宝丹を用ゆるに伊勢真珠の上品を入るゝよしにて其價を先觸し下品の真
珠を入る者ままあり真珠上品ハかけ目一匁に付價二百目位より下品に至
てハ掛目一匁に付價一匁余のものもあり此等をもつて偽物をこしらへたて着るもの
或ハ軽粉丸などいふを丸るめたる丸等を與ふるに軽粉でも又それをかるめし等を
いまだ同様の丸薬を別にこしらへおき前の丸薬をいれて毎日二匁づゝも見
稀少しづゝも薬ハ眩暈しやすれども別にこしらへおきたる丸薬に多く眩暈剤を
用ゆることを深くかくしおきて病に用ゆる故に少しの効ありても全治せること
悪ハなどかくおそろしくして薬を長服せしめなどして辯をもつて病者をたぶらかすべけ
医をとかへぬやうにつゝしみたまへし道を守る医來て速に眩暈剤を與へて治せんといふとも
其医のかへるを待て眩暈剤ハ一時の効ありても薬毒にて御身のためよろしからずとて
などいひさまたぐる者ある中に病苦のなやみにいつしか精氣つかれ終に眩暈

剤用ひがたきによりて死する者まゝありて或は皮肉筋骨を腐し奇怪岩石の如き
の廃人となり或は起居するにも自由ならず手足屈伸ならずして終に薬効あらざるにいたりもし
る者まことに多し是等は余が深く歎し悲む所なり
○凡軽粉を初めて服する人は先二三分与へて瞑眩の軽重を試て而后に分量
適宜に増減すべし又生じ乳をつぶる一分は軽粉二四分にあたる薫剤七分生
砂水銀の類一分は軽粉丸などの瞑眩に同じどろしては軽粉に同様なりかるがゆゑに
一分は軽粉八分に当る延寿丸徽毒の二方は廻り七日分にさだむるところは
かるがゆゑに四分ぐらゐなり分量にあるべきなし
○薫方の朱砂水銀丸散方の軽粉どろしとかるがゆゑに等を服すれば其人は
生質によりて骨痛頭痛或は諸瘡諸腫一度は痛をまし或は膿汁多く出
ることありて是結毒を散解し腐肉をさりて肌肉を生ずるなればいよいよ服薬

すれども不日治すべし或は熱を發し赤斑を發する者あり或は腹痛して大便
下利する者あり或は口中腫爛してよぶれを出すものあり爛傷甚しき者はまづ
薬を已め石榴の皮に甘草少し入せんじ常にふくむもよろし又は緑豆一味
をせんじ常にふくむもよろし又涼膈散に桔梗石羔を加へせんじ漱するも
よろし尚いまだ全く病毒去ざる者は口中治する事を待て又前方を服して病
根を除くべきなり凡て黴毒の薬を服して薬毒に中るときは口中痛むこと尤は
食すること叶はざるゆへに羸瘦し或は悪物をよぶれに出し歯齦潰爛枯燥くこれ
瞑眩の所為にして薬毒の害なれども其病毒を抜去るなり故に口中治するに随
て飲食すゝみ一月あまりするの中に精気本に復し肥満になりて更に後年の害
あることなし又軽粉一二三分を一廻り七日に服して十日餘りも口中いたむ者
あり又軽粉一分を七日に服して口中いたまざる者もありされども二分を用ゆるハ

ましと用ゆることあり凡其證に應ざる者ハ中痛ずとても効ある者あり効なき

ときハ應ぜずとしるべし然るを初学の者ハやゝもすれバ治療の法なくしとかくさだ徽毒

の薬ハかるすしバ瞑眩せざれバ治せざる者と心得輕粉劑薫劑かるゆうし劑ごろ

言と剖出し乳に入びろ劑の類を用ひ其人に應ぜずして効もなき人を頻に是を加倍

して用ひ或ハ方中に輕粉一匁とあるも是を一廻り七日にかるすしバ用ゆるものと

心得輕粉一二分服しても大きに瞑眩する生質の人に如法用ひて大きに口中

爛傷歯を脱し数日を歴て口中治りて後に至る閉口食鋪ハざる者あり又ハ瞑眩に絶ぞ

して死する者もあり是をもつて世人輕粉をおそるゝあり此今に輕粉の罪にあ

らずと醫の罪なり戒べし慎べし故に前文に云如く其人の瞑眩の輕重をみて治療

することと專要なり尚ん箱を作る厚さ一寸の板にハ八歩釘を打ちても切ほしまる

四歩釘をもつて造るに三寸釘をうたぞ板とれて抜ず薬を用ゆる法もこのごとし

薬力たらざれバ病毒を抜去ることハ不能大過にあれバ人を損ふ故に匙加減といふ
こゝろ得べき事なり兵法ハ神にして之を明にすといへり医術も又然り
○黴毒を病る者霊天蓋或ハ鹿頭霜猿頭霜狼頭霜するひハ龜の霜するハ
鳶の霜或ハ蛇霜牛肉等を食する者あり此等ハ澄に重ざる者ハ治する事もあ
れども全治する者少し又ハ新病ハいまだ結毒にならざる中に食してかへつて害ふ
る者多し最も結毒となりて諸薬効あらざる者にハまゝ効ある事もあ
り是等の類を用ひんとならバ鶏鹿散用ゆべきの説なるべし
○黴毒ハ灸治にて不相応の者にて一旦効を得る者ハ此黴毒気をおいこむにて
一時の功を得るといへども又必ず後て再發害となす者也妄ハ名灸ハ秘術に出ると
○世俗黴毒ハ傳染者といへ今の人多く冷病ひとなりて人をもつて温めざれバ治せざる
とも得温泉に浴して表毒を骨髄におゐこミ或ハ下部より毒を頭へ上攻させ

甚しく害せらるゝ者ゆゑかならず入湯ハよろしからざるなり此病ひ冷て生ずる者ハおゝいに

○延寿丸　一名晋造丹　主治下疳便毒楊梅瘡筋骨百節腫痛附骨疽淋瘡嚢癰淋瀝痔疾鶴膝風痛風湿頭痛瘰癧氣腫湿眼鼻梁腫痛鼻柱蝕爛脳漏鼻淵耳聾咽喉腫痛腐爛嗽して痰を吐き肺痿肺癰に似たる者聲唖舌瘡木舌歯齦腐爛唇腐爛胸痛心痛脊痛脇肋痛腰痛諸結核癮疹麻痺偏枯中風に似たる者諸悪瘡腐爛疼痛或ハ潰破して臭氣深く黄水稀涎出て久年不愈者或ハ鵝掌風すべて黴毒の證なる病軽重遠年近日を問ハず皆速に治するの神薬ハなり或ハ山帰来剤五宝丹或ハ紫金丹剤軽粉剤水銀剤そのほかの剤ぺ尽ひてあり剤どろ毒を剤からめら剤山多くしり　かぎ薬等をのちひて功あらざるものを治する神のごとし用ひて甚妙効とあるべし

用ひやうくハしくハ薬にそへおき申べし

○

徽効散一名百中散　主治是も延寿丸のごとくにて延寿丸およびまへにいふところの諸薬用ひて功あらざる痼疾結毒を治するの霊薬なり然りといへども喫茶薫薬剃髪を用ひて功あらざるものハ此薬を用ひて功あり用ひやうくハしくハ薬にそへあり以上の二方ハ家方にて賣薬として方を出さず

○

治瘡丸　主治これも延寿丸に同じ掻して徽効散延寿丸等を用ひて功あらざる者を治す亀板さけをつけてあぶりこがして八匁　大黄八匁　辰砂四匁　軽粉一匁

けいふんハどくしきものをよくとかるめられなりとくてもよろし

右四味飯にて丸じ十五つぶにして一日に一ぷくづゝさゆにて二度に用ゆべし

以上の三方を用ひるにハ兼用の薬ハなくてもよろし然りといへども身体

羸瘦精氣虚るところへ大便自下利ある者或ハ氣血虚るところへ汗あせいづる者ハ大補湯益氣湯或ハ脉沈細にて手足ひへ痺など冷痛ある者ハ真武湯
熱ありて飲食味ひなきものハ清脾湯其他症によりて兼用すべし

○以下の五宝丹雞鹿散奇良湯捜風解毒湯或ハ雞汁煎紫金丹等多る又山歸来とのハ二主とし五宝丹ハ真珠を以て主薬と構りて貧者其價
又昔も五宝丹の黴毒を治するハ真珠の功にあらず山歸来の功なり其ゆへを以前山歸来のある方ぶて一日又山歸来二三十匁ぞつりも數日用ひて功あれものハ五宝丹と用ひるとも功と得がたし又真珠一味と毎日一匁づゝ服するともさらに功あれ者なりて又山歸来ハ輕粉どくあれからちそれひろる生く乱いづれも一味と用ひてよる功ある者あり真珠のミ一味用ひて功あれ由へよ五宝丹の真珠ハ極下直なるまでもよろし又山歸来ハ毎日二三十目づゝも用

ひゐなをらバ其症ニ應ずる者ハ十日なをらざる内ニ妙功あり若十餘日用ひ
て功たゝざる者ハ應せざる也久服するも益なし故ニ以下の五方ハ一旦用ひて
功なきものハ再び用ひるとも功なし又山皈来を服するに塩断とあるを
よろしからず是ハせいのゆるミ薬毒へ塩うるときのごとくハ腎経え
まりて薬氣のめぐりがおそろきとそのゆゑなれバ平日の塩ぶんハ含ぶれ
バ精氣よろしかるべしいかに塩だちして山皈来を服するも症ニ應せ
ざるものハ功なし又症ニ應ずる者ハ塩断せずとも功あるべし
或ハ山皈来を服して何となく氣分わるしく耳鳴いだし或ハ舌上に
黄胎黒胎を生ずる者などハ却て服すれバ害あるべし耳聾となる
者もまゝあり山皈来ハ廣東よりの夏門ハ是ニ次琉球あしく菝葜功なし
○五宝丹 主治是もやはり延寿丸の如しされども高金の薬品ゆゑおく

にて其効は黴瘡殺延寿丹よりは大きにおとれり然ども十分に二三はなほる
ひとも効を得る者有べし　錬乳 三匁六分　辰砂 二匁四分　琥珀 六分　龍脳 六分
珍珠 二分　飛白麺 二十目　右を未飛白霜と名づけて軽粉水銀の三味を火にかけてまぜ合せ孫をとりて粉にしたるを一匁の分に二三分ほどくらひ用ゆる
者あり此物粗益の不足して多くは効有しても此不の眼睛を苦む者多けれ　右六味粉にして二十六貼にわかち毎日山帰来
四十目に水一升入合にせんじて一番に水六合入三合にせんじ此煎汁三合をのみて
散薬一貼づつ飲服を一日に二貼已上十二日に服しおはるべし
鶏鹿散　主治是も延寿丸の如くにして結毒痼疾にて身体羸痩骨
立体虚弱或は盗汗或は自下利或は労咳等さまざまに黴労といふの類衰弱服し
がたき者に用ひて結毒を治し自下利を已め労咳を治し盗汗を治し精
気をまし肌肉を生ずるの妙方なり此薬精気壮健にして新病の者は
効を得べし　鶏 かしらとあしの毛を用ゆるもくちばしつめをとりて骨共にそくろせたとをし肉ばかりより干しおくべし　鹿角 二月 ひろし

くろやきにして四匁 薩摩小人参 四匁 山帰来 廿目 右四味粉にして四十二貼とし毎日
山帰来 三十目 甘草 四匁 右二味水八合入四合にせんじ二番に水四合入二合に
せんじ汁一合にて粉薬を一貼づゝ抜し肉をも串を六つにしけこれを一切づゝ
食べし日に四たび夜に二度のみて七日までのつゞけまべし

○寄良湯 主治諸悪瘡結悪腫を治し或ハ骨疼筋痛を治し
或ハ結毒腐爛を治す凡て黴毒一切通治の妙剤なり
山帰来 壱斤 川芎 六匁 金銀花 六匁 天童草 十把から 甘草 二匁八分
茯苓 八匁四分 木通 八匁四分 当帰 七匁 右七味七貼とし毎日一貼に水八合入四合
にせんじ二番に水四合入二合にせんじ一日のうちにもちひをも服し 大便秘結する者ハ
大黄 一匁かまたハ五七分より一匁二分くらひ加へてよろし

○捜風解毒湯 主治楊黴瘡および筋骨疼痛によろし

山皈来 壱斤　防風　苡薏仁　木瓜　木通　白鮮皮　各三匁五分
皂角仁 二匁五分　當皈 五匁　白芷　甘草　金銀花　皂角刺　各二匁五分
右十二味七貼とすし　煎法服法前の如し

○救淋解毒湯　主治　諸淋小便不利を治し　肉下疳を治す
山皈来 弐斤　黄連　木通　茯苓　甘草　黄芩　大黄　桑白皮　大腹皮
各四分二分　夏枯草　十分五分　滑石　十四分　右七貼にわかち一貼に水八合を四合
にせんじ二ばんは水四合入二合にせんじ一日に一貼づつ欲服すべし

○反鼻丸　主治　一切上部の結毒　黴頭痛　黴眼　頭面瘡　鼻梁腫痛　咽喉腫
痛其他筋骨疼痛等に兼用てよろし　或ハ黴毒治后に久服してよろし
反鼻 十五分　川芎 十五分　大黄 二十匁　當皈 二十匁　肉桂 九分　右五味 粉に
して飯糊にて丸し　菜にて一度に一二分づつ白湯酒にて服す　一日に二三度

○再造散 主治便湿瘡毒疳疾および陰嚢癬疥癬臁瘡便毒等によろし 陳皮 六分 白牽牛子 六分 鬱金 五分 皂角刺 三分 大黄 十分 右五味粉にして糊酒にて丸じ一度に一二分づゝ酒か白湯にて服用すべし

是も黴瘡治后に久服してよろしかるべし

○荊防敗毒散 諸悪瘡便毒疥癬などおよび發表し寒熱往来するものを治す 羌活 独活 柴胡 前胡 枳實 川芎 桔梗 茯苓 人參 虚ならば入 壮実なれば去る 忍冬 荊芥 防風 連翹 各三分 甘草 一分 生姜 二片

右水一合半入一合にせんじ服すべし

○大黄牡丹皮湯 便毒および楊梅瘡懸癰淋病風毒腫或ハ乳岩瘡の類および下疳腫痛甚しく紫黒にして小腫血熱劇しく陰嚢挫痛によろし

大黄 八分 牡丹皮 六分 桃仁 四分 冬瓜子 一分 芒硝 一匁二分

右八味水二合入八分までせんじ芒硝を入服し淋病痛甚しく又者ハ滑石をかふ

○附子理中湯 心下痞鞕して吐下し小便不利或ハ心下急痛或ハ大便下利拘痛或ハ腹中冷痛四肢逆冷滞穀下利する者を治す

人参を用 附子 甘草 蒼朮 干姜 各七分 附子 六分 茯苓 八分 沢瀉 八分 葛葉 八分 右水一合八分入八分まで せんじ服す

○八味地黄湯 臍下不仁小便不利或ハ頻数或ハ小便自利或ハ消渇して小便反て多く飲丈一升なれば小便も又一升するが如き者を治す後の虚損を治するの妙剤なり

茯苓 牡丹皮 各四分又ハ五分 桂枝 附子 各二分 生地黄 一分二分 山茱萸 山薬 各六分 沢瀉 右水二合入八分まで服用に

○補中益気湯 精気をまし虚熱を退け自汗盗汗を治し脾胃を補ひ気血を生ずるの妙剤なり

黄耆 一分 人参 三分 白朮 当帰

各七分 陳皮五分 柴胡四分 升麻三分 甘草三分 大棗三分 生姜二片

右水煎し服す 脾胃虚の泄瀉ハ芍薬茯苓沢瀉を加へ用ゆ

○十全大補湯 氣血ともに虚し発熱悪寒自汗盗汗肢體倦怠し或
頭痛眩暈口乾て渇し久病虚損遺精白濁あるひハ大便自下利小便
短少虚労不足肌肉枯痩を治す 人参 白朮 茯苓 當歸 川芎
地黄 芍薬 黄耆 肉桂 甘草 附子 各三分 右水煎服を

○九味清脾湯 湿熱数月さらず日晡に発熱して朝にさむる或ハ寒
熱往来して小便赤く飲食すゝまず身體羸痩或ハ自下利し諸薬
効なきものに用ひて妙効を得ること神のごとし
柴胡 黄芩 茯苓 蒼朮 厚朴 青皮
半夏 草菓 甘草 各四分 生姜三分 右水二合へ

八分ま煎服を喫つべし杏仁の味あるをとるまでかへ

黴瘡雑話終

○黴瘡損談 カタカナ 此書は黴瘡雑話に載ざる所の奇方秘方奇薬製剤ドロンス剤薫方或ハ耳聾の妙薬淋病の奇方瘰癧の奇方等およそ二十二方を出し黴毒の治療をするもの看者ぞんぜでいつなるべしと

○妙薬奇覧 小本一冊 此書は余四方を漫遊て諸名家の秘し用ひて大効を得る所の禁方或ハ民間の奇方名灸等を集る所若干の中を数年用ひて起廃の功を得る者を多く凡百四十三方を出す此書もまた黴毒外治療並に生く乳そつびるごろしをかるめら煙粉軽粉白霜等の製法秘授秘伝を詳に記して医家も俗家も重宝の書なり

延壽丸 一包十五日ぶん 代銀六匁

徽効散 一包十日ぶん 代銀六匁

治瘡丸 一包十五日ぶん 代銀八匁

奇良湯 一包七日ぶん 代銀拾五匁

本家調合所 大坂小久宝寺町三休ばし西へ入 舩越敬祐

同心斎橋通り八まんすぢ北へ入 伏見屋清右衛門

本國賣弘所 伯州米子 舩越文太郎

鍋屋彦右衛門

此薬ハ諸國所々本屋薬種屋小間物屋等によりおいてこれをもとめ下さるべし若当所に無之ハ其所の書林薬店などにたのミとりよせなさるべし

當所取次處

右は天王の延壽丸徽効散の二方ハ賣薬として薬方をあらはさず其國々の取次所にて求べし治瘡丸奇良湯ハ前文に薬方をあらはし病者自ら調へ服すべし又賣弘め所にもあつて抑奇良湯の天童草ハ六月土用中にとりをさむるを上ぶんとし土地によりてちがひもあるゆへ賣薬

おもくし並に若遠国にて黄葉も天童草もなき時は捜
風解毒湯を用てよし○此奇良湯の主治骨疼筋痛
或は癩疾下疳便毒楊梅瘡黴頭痛黴眼咽口舌のいたみ
又は聾唖耳聾或は頭面より足胸脊腰腹等の悪腫悪瘡
小延壽丸黴毒殺治療丸等を与へて治せざる者に用ひて
妙功ある事は此書中に奇良湯のことを名とあらはさば
或は其功延黴治の三方と同様なれば讀む人推するゆへに
こきと略するものなり奇良とは山帰来のことなり山帰来
奇妙の良功あるゆへに古人奇良と名づく又土伏苓とも云
此奇良湯の方中に天童草ありて能く黴毒の汚濁邪熱

となるゆへに他の山帰来剤五寳丹等よりハ其功おとる
まさる此薬ハ延徽治の三方と違ひ口中いたまず大便下
らず只小便に病毒をさるゆへ剤剤をおそるゝ者ハまづ奇
良湯を用ゆべし其上を用ひて速に治しおりとも其病毒
甚ござねけがるゝ者あれば三四十日ハ一日もおこたりなく
用ひざれば再発す但し然りといへども貧者其価に苦し
まば延寿丸等を先に用ひて治するときハ金銭の費へ
なし福者剤剤をこふならば奇良湯を先に用ひて
治せらるゝときハ口中いたむの苦しミなし若奇良湯を試
前よりも用ひて功ある者ハ他の山帰来剤ハ勿論五寳丹

とても功あるべし此病ハ延徽治のうち城あくとも用ゐ
バ速りに治を施し貧者も延徽治の意せざるところ
奇良湯を用ひされバ治せざるなり故に業とあるふるれ
貴賎貧福の隔てハなき者なり

繪本嶽瘡軍談　全六冊

此本ハ賣弁にあらず天下の病者瘡病に苦しむ者を
すくハんがためにとてあらハしたれバ施印にして世に弘む
故に至の人ハ紙料を集すれバ板木料摺賃とも代何百冊
にても板をふせ進ぜべし此板すりて宜しき紙と吟
味いらし兼て買ひ置る故へ元銀にて上げ申候